DOI 10.18995/24344710.6.93

研究ノート

南フランス・ガール県東部のロマネスク聖堂（３）

中川久嗣

Les Églises Romanes dans le Département du Gard(3)：Bagnols-sur-Cèze et ses Alentours.

NAKAGAWA Hisashi

Résumé

À la suite de la monographie précédente, je traite ici les églises, les abbayes et les prieurés de l'époque romane ou du style roman qui se trouvent à l'est du département du Gard, surtout autour de Bagnols-sur-Cèze. Ce pays correspond approximativement au sud de l'ancien diocèse d'Uzès, et aujourd'hui au nord de l'arrondissement de Nîmes. Sur chacune de ces églises, j'analyse son histoire brève, sa forme, sa structure architecturale, ses sculptures, et ses décorations, etc.

本稿では、前稿に引き続きガール県東部（およそ現在のニーム郡 Arrondissement de Nîmes）のバニョル=シュル=セーズならびにその周辺に点在する中世期のロマネスク聖堂を対象とし、可能な限り知りうるものすべてを訪問・調査し考察を加える。名称については、本文中で建築物としてのそれを指す場合はそのまま「聖堂」とし、個別的名称としては「教会」あるいは「礼拝堂」を用いた。それぞれの聖堂についての参考文献・資料などの参照情報は、各聖堂ごとに記したが、全体を通してのビブリオグラフィーは最後にまとめてある。写真画像は筆者の撮影による。誌面の都合ですべての聖堂の写真画像をここに掲載することはできない。それらは筆者開設のウェブページ（http://nn-provence.com）で閲覧可能である。

30. 1　バニョル=シュル=セーズ（Bagnols-sur-Cèze）とその周辺［承前］

30.1.20a　ロダン=ラルドワーズ／サン=ジャン=ドゥ=ルジーグ礼拝堂（Chapelle Saint-Jean-de-Rouzigues, Laudun-l'Ardoise）遺構

ロダン=ラルドワーズは、バニョル=シュル=セーズの南東に位置し、バニョルから県道 D6086

を南へ 6.5 キロ、さらに県道 D9 を西へおよそ 4 キロである。コミューンの街区は県道 D9 から分かれる D121 の北側にある。その背後にはラコー台地（plateau de Lacau）が広がっており、ロダン=ラルドワーズの村のすぐ北の丘の上に、古代ガロ=ローマ時代のオッピドゥムの遺跡が残っている。通称「カン・ドゥ・セザール」（Camp de César）すなわち「カエサル・キャンプ」と呼ばれる要塞都市である（ただしカエサルがここに滞在したという記録はない）。村役場（mairie）のすぐ北にはサント=フォワの小丘があって、13 世紀にはこの丘の上に建つ封建時代の城塞を、中世の集落が取り囲んでいた。現在その城塞は消滅し、白色苦行会の礼拝堂（17 世紀）と大きな聖母子像が建てられている。村役場からこの丘の西側に回り、パブロ・ピカソ大通り（boulevard Pablo Picasso）を北へ 100 メートル進むとフレデリック・ソヴァージュ通り（rue Frédéric Sauvage）となり、さらにそれを北へおよそ 1 キロ登ると森の中に開けた駐車場に出る。そこからは徒歩となり、北東に向けて 600 メートルほど山道を登るとオッピドゥムの遺跡に至る。

このオッピドゥムは、北をセーズ川（La Cèze）、南をターヴ川（La Tave）に挟まれ、東のローヌ川にも近く、河川交易においても地の利を持つ要害であった。大きさはおよそ 18 ヘクタールで、その歴史は紀元前 5 世紀の鉄器時代にまでさかのぼり、その後最終的に放棄される紀元 6–7 世紀頃までの、さまざまな時代の遺構が重なっている。遺跡の中心付近から北西方向に伸びている城壁の痕跡は土着ガリア人が構築した紀元前 5 世紀の最古のもので、それに対して遺跡の西側に南北に走る城壁の石積みは、ローマがこの地域に進出してきた紀元前 1 世紀頃のものとされる。現在目にすることのできる遺構の多くは、主に紀元 1 世紀のローマ時代のものである。最も目立つものは遺跡の中ほど西寄りのところに立つ高さ約 8 メートルの円塔（直径は 9 メートル、北側は崩れている）と、円塔とほぼ同じ高さでそこから南東方向に伸びる城壁、そしてそのすぐ東に付けられた 2 つの小さな城門である。円塔の内部には、さらに小さな円形の構築物の土台が残されている。この円塔と城壁は、防御的な役割というよりはどちらかと言うとモニュメンタルな建築物であった。2 つの小さな城門のすぐ北側にはやはり紀元 1 世紀に造られた 643 ㎡の広さを持つほぼ正方形のフォールム（内庭部分は 3 方をポルティコや商店に囲まれていた）と、さらにその北に 429 ㎡の長方形のバジリカが並ぶ。バジリカには 16 の柱の土台が残されている。またバジリカの北側には半円形の「後陣」（abside）が付けられており、ここにも柱の土台が 2 つ認められる。この部分は裁判などの際に使用されたものと見られている。円塔の南東 35 メートルのところには、より大きな城門とそれを通る幅約 5 メートルの通路が付けられている。大きな城門の南側には住居区画が続く。そこには職人や商人の家、さらにオリーブ（あるいはブドウ）の圧縮場なども見つかっている。このオッピドゥムは、ローマ時代後期に

30.1.20a　Camp de César.

おいて部分的に放棄されながらも住民が住み続けるが、6 世紀後半または 7 世紀初め頃には最終的にすべて放棄されるに至ったようである。

オッピドゥムの住居区画の南側から、この台地の東の端に沿って、遠くにローヌ川を見渡す広大なパノラマを見ながら北へおよそ 400 メートル歩き、さらに断崖から 100 メートルほど西に入ったところにサン=ジャン=ドゥ=ルジーグ礼拝堂の遺構が残っている。この礼拝堂がいつ頃のものかということについては、その建設時期を特定できるような明確な特徴や彫刻装飾の類いが認められないために容易ではないが、L. Alègre によれば古代の異教の寺院の跡に、その石材を用いて 11 世紀頃に建てられたものであるという。L.-H. Labande はもっと古く、メロヴィング期末期の 9 世紀頃にさかのぼるものと考えている。いずれにせよ、ガール県東部地域では最も古いものの 1 つである。ポン=サン=テスプリのサン=サテュルナン小修道院（prieuré de Saint-Saturnin-du-Port［30.1.1］）を介してクリュニー修道会に属する小修道院（プリウレ）があったとされる。史料にその名が現れるのは 13 世紀半ばのことで、最初は単純に「トドンのプリウレ」（prieuré de Todon）と呼ばれていた。ロダンの領主ギヨームの 1258 年の遺言書に、30 ソルの土地をこの「トドン」に遺贈すると書かれている。このプリウレは 14 世紀後半頃までは健在であったが、15 世紀の百年戦争後期になって被害を受けた。その頃、聖堂は「サン=ピエール=ドゥ=トドン」と呼ばれていたようであるが、16 世紀になると今度は「サン=ジャン=ドゥ=トドン」（Saint-Jean-de-Todon）という名前に変わる。18 世紀には荒廃して半ば廃墟化していた。それでも地元では、皮膚病などを患う子供をこの場所に連れて来て快癒祈願をする風習があったという。19 世紀になると「サン=ジャン=ドゥ=ルジーグ」と呼ばれるようになるが、聖堂自体は完全に廃墟となり、壁面の遺構だけがかろうじて残る状態であった。19 世紀から断続的に発掘が行われてきたが、最近では 2002 年から組織的な学術調査が行われ、特に 2009 年以降は聖堂の西側および南側に広がる墓地の発掘が進められている。

サン=ジャン=ドゥ=ルジーグ礼拝堂の基本的な平面プランは非常にシンプルで、東西が 25 メートル（内寸は約 24 メートル）に及ぶ長い単身廊形式で、南北幅は約 8 メートル（内寸は約 6.5 メートル）ある。その身廊は、西側の長方形の部分（東西の内寸約 15 メートル）と、東側の内陣部分（半円形の後陣を含めた東西の内寸がおよそ 9 メートル）に分けられる。この 2 つの部分は、もともとは壁で区切られていた（なぜ壁で区切られていたのかについてはよく分かっていない）。かつて L.-H. Labande は、東側の内陣部分がもともとの古い部分で、その後に西側の長方形の部分が増築・延長されたものであるとしていた。しかしより精緻な考古学的調査を踏まえた Y. Ardagna らの最近の研究によると、聖堂としては西側の長方形の部分こそが 11 世紀あるいはそれ以前に建設されたもので、内陣部分はそれを東に延長する形で 12 世紀頃に建設されたものであるという。ただしこの内陣部分が、さらに古い古代の神殿の上に建てられたものであるという可能性は否定されていない。

身廊部西側の長方形の区画は、西側の壁の中ほどに方形の出入口が付けられている。この区画の南側には小さな方形の建物（の土台部分）が付属する。これは古いプリウレと思われる建物の一部をなしていたものであり、あるいはかつては方形の鐘塔であったのかも知れない。この建物のすぐ横には、やはり聖堂内部との出入口が開けられていて、内部からは数段の石段

を登って出られるようになっている。これはプリウレの建物や聖堂の南側に広がっていた墓地との行き来のためのものであろう。東側の内陣部との境に、およそ 1.3 メートル四方の正方形の石組みの遺構が残されている。これは 1866 年に発表された L. Alègre による平面図には見られないものである。L.-H. Labande の 1902 年の著作にもそれについての記述はない。

30.1.20a　Saint-Jean-de-Rouzigues.

聖堂の東側半分にあたる内陣部分（後陣部を含む）は、西側の長方形の部分が不整形な石の荒積みであるのに対して、比較的よく切り整えられた石材が精緻に組まれたものとなっている。したがって建設時期も、この内陣部分の方がより新しいということが石積みの様子からもうかがえる（ただし、内陣部分の壁の一番下の基礎部分はそれより上の石積みとは多少異なることには留意しなければならない）。ところでこの内陣部分において非常に特徴的なのはその外壁に付けられた、方形の基壇の上に立ち上がる丸い（半円形の）扶壁の存在である。身廊北側外壁の中央に付けられた扶壁だけは方形であるが、聖堂東端の後陣の左右 2 カ所と、身廊南側の壁の中ほど（内陣部の東端にあたる位置）の 1 カ所の計 3 カ所の扶壁が半円形である。このような丸い扶壁は聖堂建築では珍しい。その大きさからも、扶壁と言うよりもむしろ小円塔のようにさえ見えるので、この礼拝堂の遺構に南側から近づくと、最初は一見して小さな城塞であるかのような印象を持ってしまうほどである。しかし土台部分が残された大きな半円形の後陣の印象的な姿を見る時、ようやくこれが聖堂建築の遺構であると納得するのである。なお、身廊南側の壁の中ほどの扶壁に関しては、最初に建設された時には方形であったが、後に（12 世紀ないし 13 世紀頃）、より大きな半円形のものに造り変えられたことが分かっている。

内陣部分は、19 世紀までは方形の石組みが敷かれた床であったようであるが、現在それらは失われ、大きな岩盤がそのまま露出している。L. Alègre のデッサンに描かれている方形の「クリプト」らしきものも今は認められない。そこに置かれていた石の祭壇は 19 世紀に破壊されてしまったようである。

礼拝堂の西側および南側に広がる墓地（広さは約 360 ㎡）では、合わせて 200 近くにのぼる数の墓が見つかっている。埋葬が行われたのは 9 世紀後半から 13 世紀終わり頃までのおよそ 400 年間で、そのうち 9 世紀後半から 11 世紀後半のものが多く、次いで 11 世紀初めから 12 世紀中頃までのものが続く。成人男性のものが目立ち、それよりも数は少ないが子供の墓も見られる。また脊椎部分がリウマチに侵された遺骸を収めた墓地も複数見つかっており、家族性の疾患がうかがわれる。この墓地は 14 世紀以降は埋葬地としては使用されなくなるが、先にも触れたように 18 世紀頃までは子供の（あるいは女性の）病気治癒の祈願のために礼拝堂の遺構にしばしば人々が訪れ、そこに隣接する墓地もまた古き記憶の場としてあり続けたようである。

AR. no.91, 2007, pp.4-5; Alègre（1866）pp.113-121; Ardagna, et al.（2010）pp.161-180; Charmasson（1977）; Charmasson（1989）pp.17-39, pp.46-58; Charmasson（1999a）pp.16-31; Charmasson（1999b）pp.48-50; Goury（1997）pp.138-167; Goury（2004）pp.1-11; Labande（1902）pp.140-147; Provost, et al.（1999）pp.403-427; Vidal et Ardagna（2010）pp.310-311; Werth（2013）pp.104-107; RIP.

30.1.20b　ロダン=ラルドワーズ／サン=ジェニエス礼拝堂

（Chapelle Saint-Géniès, Laudun-l'Ardoise）

サン=ジェニエス礼拝堂は、ロダン=ラルドワーズの村から県道 D9 をはさんですぐ南（D9 と D240 が交わる大きなロータリーの南）にある村の墓地の中にある。南北の長さがわずかに長い約 4 メートル四方の方形の建物に半円形の後陣が付いているので、一見したところ、それだけで小さな聖堂がそのまま残されているような印象を受けるが、実際は、もともとの聖堂の南側トランセプト（南翼廊）だけが取り壊されずに残されたものである。本来はこれに加えて主後陣、北側のトランセプト、そして東西に長い身廊があったわけで、規模としてはそれなりの大きさのものだったと想像できる。建設は 12 世紀である（L.-H. Labande は 11 世紀初め頃の可能性もあるとしている）。古代のヴィラの跡に建てられたという。しばらくはロダンの教区教会であったが、14 世紀になって新たにゴシック様式のノートル=ダム=ラ=ヌーヴ教会（Notre-Dame-la-Neuve）がロダンの集落の中に建てられたことによって使われなくなり、18 世紀から 19 世紀にかけて取り壊しが進められた。

かつての南翼廊である建物の外壁は、不整形の小石材が荒積みされている。南側と西側、そして東側の半円形後陣には、半円頭形で縦長の窓が開けられている。これらの窓はすべて外側に向けては隅切りされていないが、窓枠は周辺の壁面とは異なって切り整えられた中石材の石が組まれたものとなっている。それぞれ頭部の半円形アーキヴォルトにはクラヴォーが並び、そのうち後陣のものが最も精緻に組まれている。南側の壁面には、窓の上に十字形の開口部の名残が認められる。建物の北側には幅 3 メートルの大きなアーチが開いていてそこから内部を見渡すことができる。高さ約 6 メートルの天井は半円筒ヴォールトである。西側と南側に開けられた窓は、内部に向けて大きく隅切りされており、その窓の底部は階段状になっている。また西壁の内側はニッチの半円アーチが 2 つ並ぶアーケードとなっている。その反対側の半円形の後陣にもやはり内部に向けて隅切りされた窓が開く。底部が階段状であるのも同様である。その窓の上には半ドームが架かる（水平のコーニスは認められない）。後陣の向かって右下に

30.1.20b　Chapelle Saint-Géniès.

は、聖具などを置くための長方形の小さな壁龕（ニッチ）が付けられている。現在のサン=ジェニエス礼拝堂は、糸杉の木々が寄り添うようにして立ち、晴れた日には青い空を背景にして、いかにも南フランス的な光景を醸し出している。
Labande（1902）pp.154-156.

30.1.21　コノー／サン=ブノワ教会（Église Saint-Benoit, Connaux）

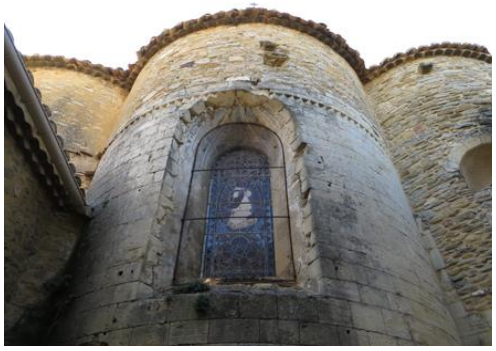
コノーはバニョル=シュル=セーズから県道 D6086 を南へ 8.5 キロである。今の村役場（mairie）がその一角にあるロンド通り（Chemin de Ronde）が形作る四角い区域が、かつては周壁に囲まれた中世の旧街区にあたる。周壁の四隅には円塔が建ち（そのうち 3 つが残る）、四方にそれぞれ城門があった。サン=ブノワ教会は村役場のすぐ北に建っている。ロマネスク期（12 世紀）の聖堂は、古くはアトン（Athon）またはダトン（Daton）と呼ばれたこの地に、サン=ピエール=ドゥ=カストル（Saint-Pierre-de-Castres）の修道士たちによって創建された小修道院（プリウレ）のものであったが、サン=ピエール=ドゥ=カストル自体、サン=サテュルナン=デュ=ポール（Saint-Saturnin-du-Port／今の Le Pont-Saint-Esprit）のクリュニー派小修道院に属するものであった。12 世紀の聖堂は、それまであった古い小さな聖堂を拡張し、4 ベイからなる身廊にトランセプト、そしてその東に主後陣と左右の小後陣が並ぶという形で再建されたものである。その平面プランは、アルデッシュ県のロンポンにあったサン=ピエール小修道院（prieuré de Saint-Pierre-de-Rompon、現在は遺構）のそれに類似しているという。14 世紀になって、コノーの集落が周壁を建設して要塞化されたのに伴い、サン=ブノワ教会においても側廊の増築や要塞化の工事が行われた。それ以降も 19 世紀に至るまで改修や部分的な増築の手が加えられている。

現在のサン=ブノワ教会の西ファサードは、大きな尖頭形のアーキヴォルトが架かる近代のポルタイユ（扉口）が中央に付けられている。その両側の出入口は今は埋められている。それぞれの扉の上には丸窓が開けられており、中央のものが最も大きいが、そのすぐ下には歯車状のギザギザ文様のコーニスが残されている。側廊にはゴシック様式の尖頭形の窓が並ぶ。トランセプト外壁には、それがかつて三角形の切妻であった痕跡が認められる。交差部のクーポールの上に立つ鐘塔は 1820 年のものである。

東端の後陣部外壁が、この聖堂におけるロマネスク期の貴重な面影を今に伝える部分である。後陣を直接見ることができる小さな中庭に出るには、村役場から北へ 30 メートルのところの 59 番地の建物の入口から中に入るしかない。主後陣はその左右の小後陣とともに、切り整えられた中石材がきっちりと積まれたロマネスク様式であるが、14 世紀以降の要塞化によって上積みされて高さが加えられている。その増築部分は不整形の小さめな石の乱積みである。12 世紀の部分の一番上の部分、すなわち 14 世紀の増築部分との境目には歯車形の帯状装飾が巡っている。また主後陣には、その帯状装飾に上部が接する形で大きな半円頭形の窓が開けられている。北側の小後陣にも同様の窓が開けられているが、頭部の半円アーチを残してそのほとんどが埋められてしまっている。南側の小後陣の窓は、住宅の建物が接続していて見ることはでき

ない。

聖堂内部は 4 ベイからなる主身廊の南北に 14 世紀以降に増築された側廊が付く。主身廊と側廊の間のアーケードには半円形アーチが並び、それらのアーチは大きな逆半円形の柱頭を介して太い円柱が受け止める。主身廊部分の天井はわずかに尖頭形となったトンネル・ヴォールトで、そこに架かるやはり尖頭形の横断アーチはアーケードに並ぶ円柱の上の部分までで止まっている。側廊の天井は現在は平天井となっている。L.-H. Labande が伝える L. Alègre のデッサンにはアーケードの一部に 4 本の小円柱が組み合わされた束ね柱が見えるが、筆者にはその存在は確認できなかった。主後陣ならびにその左右の小後陣はどれも尖頭アーチの東側にあって、平面プランは半円形で半ドームが架かる。L.-H. Labande は小後陣の内部は方形であるとしているが、20 世紀中に元の姿の半円形に戻されたようである。交差部の上には円形のクーポールが載るが、それを支える四隅のトロンプには、植物の花弁彫刻が施されている。南西角には、内部が螺旋階段になった小円塔がある。16 世紀の宗教戦争期に作られたものであるが、聖堂内部にこのような小円塔が残されている例は珍しい。



30.1.21　Saint-Benoit de Connaux.

Bardy, et al.（1966）p.46; Clément（1993）p.218; Goiffon（1881）p.103; Labande（1902）pp.88–93.

30.1.22　サン=ポール=レ=フォン／サン=タンドレ=ドゥ=セヴァヌ礼拝堂

（Chapelle Saint-André de Sévanes, Saint-Paul-les-Fonts）

サン=ポール=レ=フォンはもとはサン=ポール=レ=コノーと呼ばれる集落で、コノーのコミューンに属していたが、1949 年にコノーから独立し、現在の名前となった。コノーの集落から県道 D145 を東へおよそ 2.5 キロであるが、サン=タンドレ=ドゥ=セヴァヌ礼拝堂は、コノーからロダン=ラルドワーズへ向かう« chemin de la Plaine »をさらに 1.7 キロほど北東に向かったところに、ブドウやオリーヴ、そしてアーモンドの木々に囲まれて建っている。10 メートルあまりの方形の身廊に端正な半円形の後陣、側壁に並ぶ力強い扶壁、その間に開けられた趣のある窓、西ファサードの見事なアーキヴォルトの架かるポルタイユなど、ロマネスクの魅力を充分に兼ね備えた愛すべき聖堂である。

周囲からは古代にまで遡る墓地が見つかっているので、この場所自体の歴史は非常に古い。この聖堂の名は 10 世紀半ばの史料にすでに現れるが、現在の建物の主要な部分は 12 世紀後半のものである。L.-H. Labande などは、後陣部分も含めて外壁の下半分に見られる古い石積みが 11 世紀前半にまでさかのぼるものであるとしている。聖堂に隣接する住居らしき建物の遺構も発掘されているが、この聖堂が付属していた小修道院のものであるかどうかはよく分から

ない。フランス革命が起こる前までは、ポン=サン=テスプリのクリュニー派小修道院の管理下にあったが、革命後に農家に売却された。19 世紀半ばになってサン=ポール=レ=フォンの教区の管理のものとに入るが次第に荒廃が進み、外壁やヴォールトが部分的に崩落し、残された部分もツタなどに覆われて、打ち捨てられた状態のままであった。ようやく 20 世紀の後半になって歴史的文化遺産保存の動きが起こり、2004 年からはコミューンの主導で本格的な修復作業が進んでいる。

30.1.22　Saint-André de Sévanes.

サン=タンドレ=ドゥ=セヴァヌ礼拝堂の外観において最も目を引くのは、西ファサードの半円頭形ポルタイユ（扉口）を飾る見事なアーキヴォルトである。長さ約 1 メートルという長いクラヴォーが、扇状に 27 個並べられている。繊細な帯状装飾の付けられた半円形のモールディング（左右両端ではそれぞれ 30 センチほど水平になる）がアーキヴォルト全体を縁取っている。同様の扇状アーキヴォルトは、例えばジョンセル（エロー県）のサン=ピエール教会参事会室の扉口、イエール（ヴァール県）のサン=ポール・コレジアル教会西ファサードやサン=ブレーズ礼拝堂（テンプル騎士団の塔とも呼ばれる）の南ファサードなどに見ることができる。サン=タンドレ=ドゥ=セヴァヌのポルタイユは、西ファサードの下 3 分の 2 を占めるほぼ正方形の出張りの中に開いているが、その正方形部分の下半分は古い石積み、上半分は切り整えられた石がきっちりと積まれた 12 世紀のものである（足場を組み入れるための穴がいくつか並んでいる）。さらにその上には不整形の石積みが続き、中央に尖頭形で縦長の窓が開けられている。最上部は切妻となっている。

聖堂の側壁には南北共に方形の力強い扶壁が 3 つ並ぶ。ただしそれらの扶壁は側壁の最上部までは届いていない。南側の外壁には、扶壁の間に外部に向けて隅切りされた細長い半円頭形の窓が 2 つ開けられており、共に西ファサードのポルタイユのアーキヴォルトと同じように、半円形で左右両端が水平になったモールディングの縁取りがアーチ部分に付けられている。両方とも摩耗が進んでいるが、そのうち向かって右側（東側）のそれは、チェック模様である。またその窓の周囲には足場を組むための穴がいくつも見られる。さらにその窓の斜め下には半円頭形の出入口が開けられている。

半円形の後陣も壁面の下 3 分の 2 とそこから上の部分では石積みの様子が異なる。下の方が古く、上の部分はきっちりとした石積みで、時代的にはそれよりも新しいものである。東端には二重のアーチが架かる半円頭形の細長いロマネスク様式の窓が開けられている。この窓は 20 世紀までは埋められていたが、2004 年からの修復工事の際に再び開けられた、後陣の最上部にはモディヨンが等間隔で並ぶ。もともとは動物の頭や幾何学模様の彫刻が施されていたが、現在は摩耗が進んでおり、はっきりとした形は判別できない。身廊と後陣の境にある凱旋アーチ（勝利門アーチ）の上にあたる位置には、塔頂部が三角形の小鐘楼が立つが、これは近代にな

って作られた新しいものである。

礼拝堂内部は 2 ベイからなる単身廊形式で、東側には半円形の後陣が付く。側壁に付けられた水平のコーニスから上は半円筒形トンネル・ヴォールトで、ベイの間に架かる半円形の横断アーチは南北両側壁において方形のピラストルが受け止める。その側壁には二重になった半円形の壁アーチが南北ともに 2 つずつ並ぶ。南側の壁アーチの内側には、内部に向けて隅切りされた半円頭形の細長い窓が 2 つ開けられている。これらの側壁の壁アーチは、方形のピラストルとなって床まで下りているのだが、アーチの起拱点には短いコーニスが付けられており、東側の後陣部ではそこに架かる半ドームの起拱点をぐるりと巡っている。またこれらのコーニスには部分的にパルメット文様や卵型装飾の彫刻が施されている。注目すべきは身廊西壁の南北両端において側壁の壁アーチを、インポスト（短いジグザグ形のコーニス）を介して受け止める小円柱が、床にではなく高さのある方形のピラストルの上に据えられていることである。アーチを受ける小円柱を一段高い所に置くこのような仕様は、例えばラ・ガルド=アデマール（ドローム県）のノートル=ダム=デュ=ヴァル=デ=ナンフ礼拝堂の西ファサードおよび後陣内部（特に凱旋アーチを受ける小円柱）、サン=ポール=トロワ=シャトー（ドローム県）の身廊および後陣、あるいはラ・ガルド=ゲラン（ロゼール県プレヴァンシェール）のサン=ミシェル教会身廊［48.4.2b］、エクス=アン=プロヴァンスのサン=ソヴール大聖堂（ロマネスクの身廊部分）などに見られるものである。V. Lassalle によれば、これらは古代ローマ建築の影響またはインスピレーションによるものであるという。ここサン=タンドレ=ドゥ=セヴァヌでは、小円柱はピラストルを基壇としてさらに上下二重になった丸いトルス（トーラス）の上に立ち上がり、コリント様式の柱頭にはアカンサスの葉が、またアバカス（アバクス）には丸い花弁が彫刻されている。この 2 つの小円柱とピラストルの間の身廊西壁の上部には、内部に向けて大きく隅切りされた尖頭形の細長い窓が開けられている。その下は扉口であるが、多くの場合それは幾重かのアーキヴォルトや側柱によって外側に向けて広がるのに対して、ここでは内部に向けて二段構えで広がっているのである。

なおサン=ポール=レ=フォンには村の中央に教区教会があるが、19 世紀に建て替えられ、かろうじてかつての古い後陣が、側廊の礼拝堂として残っている。しかしそれもやはりかなり改修の手が加えられていて、どれほどロマネスク期の姿をとどめたものであるのかは判然としない。

Clément（1993）p.394; Labande（1902）pp.94–99; Lassalle（1970）pp.60-61; Poisson（2006）pp.127-129.

30.1.23a　ゴジャック／サン=ヴァンサン教会（Église Saint-Vincent, Gaujac）遺構

ゴジャックは、バニョル=シュル=セーズから県道 D6086 を南へ約 10 キロである。コミューンの中心は D6086 から D310 に入り西へ約 700 メートルである。コミューンの集落のすぐ西のサン=ヴァンサン山の上に、古代のオッピドゥムの遺跡が残っている。県道 D310 が集落の西端において北へと方向を転ずる交差点から« Oppidum » の標識に沿って幅の狭い道

« chemin de l'Oppidum »をその山に向けて進む。D310 を離れて約 500 メートルで民家が途絶え車両進入禁止となるので、そこからさらに徒歩で約 1.4 キロ登るとオッピドゥムの入口に至る。そこにはかつての城門の遺構があり、出入口の向かって左側が紀元前 2 世紀から 1 世紀前半頃のガリア人の塔の土台、右側がローマ時代の紀元 1 世紀から 2 世紀前半に建設されたとされる方形の「トラヤヌスの塔」の土台部分である。この門からオッピドゥムの中を 100 メートルあまり東に進むと 5-13 世紀の中世集落の遺構となり、さらにそこから南へ 100 メートルで、サン=ヴァンサンの山の南側のパノラマを見渡すことのできるテラスに出る。そこにはローマ時代の浴場施設の遺跡が発掘されて保存されている（かつてはここがテンプル騎士団のコマンドリーのものだとされていたこともあった）。

標高 270 メートルのサン=ヴァンサンの山に最初に人が住み始めたのは紀元前 6 世紀後半とされ、前 425-390 年頃には防御壁を持つオッピドゥムが作られた（周囲 1245 メートル、広さは約 8.5 ヘクタール）。この時代のマッサリア（マルセイユ）との交流を示す遺物も発掘されている。前 2 世紀終わり頃には、オッピドゥムはいったん放棄されたようであるが、前 1 世紀前半からこの地域のローマ化に伴って再び人が住み始めた。このあたりにはプリニウスが『博物誌』（III, 37）で伝えるサムナゲンセス（Samnagenses）族が住んでいたようであるが、前 40 年頃にはローマの統治下において彼らの重要な拠点の 1 つとなった。同じローマ都市のネマウスス（ニーム）からはある程度自立していたようである。アウグストゥスの時代にはラテン権を与えられ、紀元 1-2 世紀に最盛期を迎えた。実際ローマ文明を特徴づける数々の建造物が見られる。例えば、アウグストゥス期（前 40-20 年）の城壁、ティベリウス期の列柱廊、前 40-20 年頃に建てられたおよそ 8 メートル四方の正方形のアポロン神殿。この神殿は敷石が敷かれたギャラリーに囲まれ、podium を備えていた。西側の階段から中に入ると内部には床モザイクで飾られた 2 つの部屋（cellae）があった。紀元 20-25（またはそれより前の紀元前 30-25）年頃に作られた浴場は 1200 ㎡の広さがあり、北側に更衣室（vestiaire／apodyterium）、ほぼ中央部分には 420 リットルの水槽を備えた温水室（salle tiède／tepidarium）、その西側には 2 つの浴槽（プール）と半円形のアプスに洗浄槽を備えた熱水室（salle des bains chauds／caldarium）、そして東側には体操場（palestre）が付属していた。

紀元 1 世紀後半頃には水の供給が滞るようになったようで、1 世紀終わりから 2 世紀初め頃に、75 ㎡の広さを持つ長方形の貯水槽（citerne）が北東の角の部分に増築された。雨水などをそこに溜めて浴場用に利用したらしい。また同じく 2 世紀初め頃、それまでの浴場の西側に新たに広い体操場が作られた。この遺跡を訪れたときに最初に目に入るのはこの広い体操場であ

30.1.23a　Oppidum de Gaujac.

る。南側は大きな半円形のアプス（外壁に 3 つの扶壁が付く）で、それ以外の三方は列柱廊に囲まれていた。この新しい体操場のさらに西側にはトイレ（8.55 ㎡）があり、熱湯室からの配水路が地面の下に付けられている。更衣室の屋根からも雨水がそこに導かれていた。

3 世紀初め（210-220 年頃）、この施設は地震の被害により浴場としては使われなくなった。地震の被害を受けなかった部分は、運命の女神とされるフォルトゥナ（Fortuna）に捧げられた聖域となった。かつての貯水槽（citerne）にはこの女神の像が置かれ、古い方の体操場（palestre）には女神への奉納物が並べられた。こうして 3 世紀後半頃までは巡礼が訪れたが、その世紀の終わり頃には訪れる者もいなくなり放棄された。民族移動期以来の混乱や社会的不安定が続いた 5-6 世紀、ここには避難場所として一時的に少数の家族が住んでいたようである。さらに時代が進み 11 世紀頃になると、古代の遺跡から石を切り出す石工たちのグループが、古代の遺跡の北にごく小さな中世集落を営んだが、13 世紀終わり頃には彼らも姿を消す。その後サン=ヴァンサンの古代のオッピドゥムは完全に忘れられてしまい、中世集落についても、少なくとも 17 世紀までには完全に廃墟化し放棄された。

この 11 世紀の小さな中世集落の遺構は、先にも触れたようにオッピドゥムの北西にある城門を入っておよそ 100 メートルのところ、古代遺跡からだと北へやはり 100 メートメルほど奥まったところにある。小さな周壁の中に南北 11 メートル、東西 20 メートルの中庭のような空間があり、それを囲むように、部屋に炉を備えた住居が 2 つ（このオッピドゥムでは古代から中世を通して数少ない住居の遺構）、そしてその北東の角にロマネスク期のサン=ヴァンサン教会の遺構が残されている。

建設された年代については、史料による記録はなく、また様式を見て取れる彫刻装飾の類いも見られないためにその推定はなかなか難しいが、C. Missonnier などはおおよそ 11 世紀後半から 12 世紀中頃としている。内寸約 5 メートル四方のベイ 1 つだけの方形の身廊に、南北およそ 11 メートルのトランセプト、そして半円形の主後陣とその左右にそれぞれやはり半円形の小後陣が並ぶ。プランとしてはいわゆるラテン十字形である。東西の全長は内寸約 11.6 メートルで、規模としては小ぶりな聖堂である。トランセプトの南北の翼廊と、3 つ並ぶ後陣の石積みが残っている。とりわけ南側翼廊の壁が、遺構としては最も建設当時の面影を今日まで伝えるものとなっている。さまざまな色合いの不整形の小石材が荒く積まれたそれらの壁の幅は 1.2 メートルほどである。身廊は土台部分のみが残る。身廊、トランセプトともに天井はない。もとは木造であったとも考えられる。少なくとも残された壁面には開口部がない。

30.1.23a　Saint-Vincent de Gaujac.

身廊部とトランセプトの間には後から作られた隔壁があり（敷居の石も残されている）、行き来はその隔壁に開けられた幅およそ 0.8 メートルの出入口を通して行われていた。これは身廊部がある時期から住居として利用さ

れるようになったことをうかがわせるものである。トランセプトに入ると、半円形の後陣が 3 つ並ぶが、上部に架かっていたと思われる半ドームなどはすべて崩れてしまっている。北側の小後陣の壁面が最もよく残っている。後陣の外部はかなりの部分が土砂に埋もれてしまっているが、内部はそれが取り除かれ、中央の主後陣の地面には方形の水槽（citerne）が作られているのが判る。トランセプトの下には南北につながる導水路があり、主後陣の水槽はその導水路と接続していた。洗礼などの祭式に利用されていたのではないかと考えられる。

サン=ヴァンサン教会では、柱頭が 2 つ見つかっている。1 つはアカンサスとパルメットが彫刻されたコリント様式のもので、J. Charmasson はこれをもともとサン=ヴァンサンの古代遺跡にあったものの再利用であるとしている。もう 1 つは葉脈などのない大きなアカンサスあるいは« Feuille d'eau »が上に向けて開く（T 字模様の大きな線刻のようにも見える）単純なものである。C. Missonnier によればこれは 13 世紀後半のものである。これらは発見された後、バニョル=シュル=セーズの考古学博物館（Musée León-Alègre）に収蔵されている。なお J. Charmasson は、トランセプト南翼廊の南側に残る東西方向の石積みの遺構などについて、それがこのロマネスク期の聖堂建設より前にさかのぼる、5–7 世紀頃の西ゴート時代の古い聖堂（chapelle « wisigothique »）のものではないかとしている。その理由の 1 つとして、南翼廊の南東端のすぐ外側に接するように子供用のものとみられる墓地が見つかっており、しかもそれが平たい瓦を三角形の屋形風に組んだ切妻型墓地（tombe en batière）となっており、これは古代末期から 7 世紀頃までにしばしば見られるものであることから、もともとあった聖堂のおおよその年代が推定できるのであるという。

プリニウス（2012）p.146; Charmasson（1999a）pp.16-31; Charmasson（1999b）pp.48–50; Charmasson（2003）pp.133-176; Goiffon（1881）p.134; Missonnier（1999）pp.32-47; Provost et al.（1999）pp.377-388; RIP.

30.1.23b　ゴジャック／サン=サテュルナン礼拝堂（Chapelle Saint-Saturnin, Gaujac）

ゴジャックの村の西からサン=ヴァンサン山のオッピドゥムに向かう登り口、すなわち県道 D310 を離れて約 500 メートルで民家が途絶え車両進入禁止となる場所（そのままま っすぐ登るとオッピドゥムの遺跡に向かう）から、南に折れて« impasse Saint-Saturnin »を 200 メートルほど行くと、サン=サテュルナン礼拝堂に至る。2 ベイからなる身廊に半円形の後陣が付いた全長 9 メートルあまりの小さな聖堂である。白や薄い黄色、そして褐色といったさまざまな色の不整形の石が荒積みされた壁面の素朴な様子からも、一見してその古さがうかがえる。古代には、この近くにサグリエの泉（source de Sagriès）と« villa » があった。メロヴィング期になると墓地などもあったようであるが、聖堂自体の歴史を知ることのできる史料や記録などはない。建設されたのはおよそ 11 世紀半ば頃とされるが、さらにさかのぼって 10 世紀後半とする見方もある。19 世紀には荒廃と破損がかなり進んだまま打ち捨てられていた。20 世紀になって多少の修復が行われたようであるが、それでも現在の保存状態は良好であるとは言いがたい。

30.1.23b　Saint-Saturnin de Gaujac.

建物は全体的にシンメトリー性に欠ける。外部には彫刻装飾の類いはまったく見られない。身廊外壁には大きさの異なる扶壁が南北それぞれに 3 つずつ付いている。身廊南側では、西のベイに 16 のクラヴォーが半円アーチを形作る扉口、東のベイには半円頭形で縦長の小さな窓が付けられている。モノリス（一枚石）となっているその窓の頭部は半円形ではなく三角形である。一方、身廊北側には土砂が高くまで積もっていて、西側のベイに開けられた半円頭形の小さな開口部（鉄格子がはめられている）も半分が埋もれている。聖堂内部においてはその開口部は、小さな出入口となっているのだが、その出入口自体は現在は塞がれており、頭部の半円アーチの一部分のみが開くという形になっている。半円形の後陣には、東端と南側にロマネスク様式の半円頭形の窓が開けられている。共に外部に向けて隅切りされているが、東端の窓の頭部のアーチはさらにその外側を石組みの帯によって縁取られている。窓のアーチを形作る扇形のクラヴォーはかなり破損している。後陣の上の凱旋アーチの壁面には、十字形の開口部が見られる。聖堂の西ファサードには小さな丸窓が 1 つ開けられているが、それ以外は足場を組むための小穴（trous de boulin）がいくつか開けられているだけで壁面には他には何もない。西ファサードの切妻の上には小さな鐘楼が立つが、19 世紀の新しいものである。

内部は 2 ベイからなる単身廊で、東西長 6.75 メートル、南北幅 3.8 メートルである。聖堂自体ほとんど使用されていないため、中はがらんとしていて、壁面も部分的に漆喰が剥がれ落ちて石積みが露出している。天井は半円筒形トンネル・ヴォールトで、ヴォールトの起点にはコーニスなどはない。側壁には半円形の壁アーチが各ベイに対応して南北 2 つずつ並ぶ。南側の壁の第 1 ベイ（西側のベイ）には、東側のピラストル（側柱）に接する形で出入口が開く。また第 2 ベイ（東側のベイ）の壁アーチの中には、内部に向けて大きく隅切りされた窓が開いている。ヴォールトに架かる横断アーチと南北の壁アーチを受けとめるピラストルのインポストは、横長に延びる逆三角形（台形）の単純なものであるが、北側の側壁のそれは逆三角形部分が下に向けて階段状にすぼまっていくタイプである。また後陣に隣接する北東端のインポストだけは、小さな三角形が並ぶノコギリの歯文様となっている。半円形の後陣には、東端に窓が開いており採光の役割を果たしている。後陣の上には半ドームが架かる。この後陣（内陣）部には、かつて祭壇がその上に置かれていた石の台座が残されている。古代後期にあたる 2 世紀終わりから 3 世紀初め頃の墓石の転用で、碑銘には« Lucius Tacitius Severus »のものとある。また扉口の内側（入ってすぐ右側）に接するように、高さ約 1 メートルの円筒形の石の聖水盤があるが、L.-H. Labande はこれを古代の円柱の再利用であるとしている。

なおこの礼拝堂が捧げられているサン=サテュルナンは、フランスではサン=セルナン（saint Sernin）とも呼ばれ、トゥールーズ最初の司教でローマ皇帝デキウスの治世下である 250 年頃

に同地で殉教したサトゥルニヌス（Saturninus）のことである。生け贄の祭儀を妨害したとして異教の司祭たちの反感を買い、雄牛に縛り付けられたままトゥールーズの市内を引きずり回されて殺された。ロマネスク最大の聖堂の 1 つであるトゥールーズのサン=セルナン・バジリカ聖堂はこの聖人に奉じられている。またオード県にある 9 世紀創建のサン=ティレール修道院には、付属教会の中に殉教の様子を表した 12 世紀の見事な石棺が保存されている。
Clément（1993）pp.394-395; Goiffon（1881）p.134; Labande（1902）pp.105-108; Masanelli（1985）pp.28-30; Narasawa（2015）pp.159-160; Provost et al.（1999）p.387.

30.1.23c　ゴジャック／サン=ジャン礼拝堂（Chapelle Saint-Jean, Gaujac）

ゴジャックの集落とは県道 D6086 をはさんで反対側（東側）に位置する。D6086 と D310 が交差するところから D6086 の側道に入り、200 メートルほど南で« chemin de Cadenet »に入る。600 メートル東に進んだところで南に折れて、狭い農道のような道をさらに南に約 250 メートル行くと、向かって右側の森の向こうに、ブドウ畑に囲まれた傾斜地に建つサン=ジャン礼拝堂がその姿を現す。

バニョル=シュル=セーズとニームを結ぶ古くからの街道沿いにあることもあって、この場所には古代から小集落があったようで、紀元前 1 世紀から紀元 4 世紀頃までのものと見られる陶器の破片が礼拝堂の周辺、とりわけ北側で多数見つかっている。中世の史料にはこの礼拝堂についての記録はなく、それがようやく現れるのは 17 世紀になってからのことである。しかしその建設年代は古く、内陣部分は 10 世紀後半頃にまでさかのぼるものと思われる。建物は高さが低く、東西に長いその外見は、保存状態が良好でないうえに外壁のほとんどが 19 世紀にモルタルで塗り固められたために、もしも建物の西端に大きな台形状の鐘楼壁がなければ、およそロマネスク聖堂の面影は感じられないほどである。東端は半円形の後陣で、縦に細長い窓が開けられている。南側の外壁には小さな開口部が 1 つあるだけで他には何もないが、北側にはそれぞれ厚さの異なる扶壁が 4 つ並んでいる。すべて屋根まで届くものであるが、屋根に近い上部は後の時代の修復によって付け加えられたものである。

礼拝堂内部は単身廊で 3 ベイからなる。身廊の天井は半円筒形トンネル・ヴォールトであるが、西側から内陣に向けてベイごとに段々に高さが低くなっている。最も高さの高い西側のベイの部分は 13 世紀、その次は 12 世紀、そして最も東に続く内陣（および後陣）部分は 10-11 世紀頃のものと思われる。この内陣部分においてのみ、ヴォールトの起拱点に水平のコーニスが付けられている。内陣の中ほどに横断アーチが架かり、その東は方形の後陣となる。横断アーチは南北の側壁にそれぞれ付けられた 2 本の小円柱が受け止める。これらの小円柱は方形の基壇の上に立ち、柱頭には幾何学的で単純な三角形の（ダイア形の）図形が彫刻されている。冠板は側壁に付けられたコーニスに接続している。

ゴジャックのサン=ジャン礼拝堂は、ほとんど使用されることなく放置されたままという印象を強く受けるが、今でも毎年 6 月には地元の信徒を集めて祭儀が行われている。
Labande（1902）pp.103-105; Provost et al.（1999）p.388.

30.1.24a　サン=ヴィクトール=ラ=コスト／ル・カステラスの城塞礼拝堂
（Chapelle castrale du Castellas,　Saint-Victor-la-Coste）

バニョル=シュル=セーズから県道 D6086 を南へ約 8.5 キロで D145 を東に折れて 4.5 キロ、さらにそこから南に 1.5 キロ行くとサン=ヴィクトール=ラ=コストに至る。集落の南側は標高約 220 メートルの小山となっていて、その山頂に、下の集落やさらにその先に広がるターヴ平野を見下ろすようにして、いかめしい中世の城塞の遺構が建っている。

「ル・カステラス」（Le Castellas、以下「カステラス」と表記する）と呼ばれるこの城塞は、トゥールーズ伯の臣下でもあったサブラン家によって 1125 年頃に建設された。この城塞を取り囲む城壁は「第 1 の城壁」と言われ、そこから山の北側の斜面を下に向けて第 2、第 3、第 4 の城壁がこのカステラスを防御していた。いくつかの塔で補強された第 4 の城壁は山裾にあるサン=ヴィクトールの集落（vieux village）を囲むもので、その一部は残っているが、第 2、第 3 の城壁は 13 世紀にほぼ取り壊されている。「カステラス」の名が史料に最初に登場するのは、サブラン家のロスタン（Rostaing IV、文献によっては Rostaing I de Sabran）がタヴェル近くのモンテザルグの土地をグランモン修道院に寄進することを約した 1203 年の文書においてで、この寄進の約定が行われたのがサン=ヴィクトールのカステラスにおいてであった。サブラン家は、次代のロスタンの時にトゥールーズ伯と共に国王ルイ 8 世率いるアルビジョワ十字軍と戦い、敗退することとなる。ロスタンはサン=サテュルナン=デュ=ポール（今のポン=サン=テスヌプリ）において国王に臣従を誓い、その証として 1249 年、カステラスをボーケールのセネシャルに引き渡した。カステラスの城壁は集落を囲んでいたそれとともに 1250 年にかけて礼拝堂を除いてかなりの部分が破壊された。その後、山上の第 1 の城壁は、14 世紀にかけて百年戦争などの戦乱を背景に、塔を持たない形で再建された。16 世紀の宗教戦争の際には、一時はユグノーに占拠されるが、彼らが退去後はクロード・ドゥ・サン=マルタン（Claude de Saint-Martin）指揮下の国王軍がここを押さえた。しかしそれ以降は次第に荒廃が進み、18 世紀半ばには廃墟化してもはや人が住める状態ではなくなってゆく。

ところでサブラン家以降のサン=ヴィクトールとカステラスの所有者は、時とともに目まぐるしく変わることになる。ボーケールのセネシャルの支配をへて 14 世紀以降はモンロール（Montlaur）家がここを領有するが、その後婚姻関係によってポワティエ（Poitiers）家の手に渡る。所有者の一人でサン=ヴァリエの領主でもあったジャン・ドゥ・ポワティエ（Jean de Poitiers）は国王フランソワ 1 世の重臣として知られる。そのジャンは、サン=ヴィクトールの所領を、1501 年にアルデッシュ出身でナポリ

30.1.24a
Le Castellas de Saint-Victor-la Coste.

王国高官となるジャン・ドゥ・ニコライ（Jean de Nicolaï）に売却、さらにその息子エマールは 1541 年に今度はフィレンツェの大金融家トマス・ドゥ・ガダーニュ（Thomas de Gadagne II）に売却した。Gadagne 家はリヨンとアヴィニョンにも邸宅を所有していたが、この地にも時折は滞在したようである。しかしトマスの息子ギヨームは 1559 年にサン=ヴィクトールをユゼスの司法官アンベール・デュ・ロワ（Imbert du Roy）に売却したことで、その後はル・ロワ家が 1 世紀にわたってここを所有することとなる。1711 年、アンベール・デュ・ロワの曾孫（ひ孫）ギヨームはトゥールーズの貴族でゴジャック出身のジャン・ドゥ・ドメルグ（Jean de Domergues）に所領を譲渡した。ジャンとその子ルイはサン=ヴィクトール教会に葬られている。ジャンの孫娘はリペール・ダロジエ家のアメデ・ジャン・フランソワ（Amédée Jean François de Ripert d'Alauzier）と結婚し、その息子アンドレ・ピエール・ルイ・プロスペール（André Pierre Louis Prosper de Victor）がサン=ヴィクトールの領地を引き継いだ。彼はアルトワ伯の近習であったが、1790 年 10 月 16 日、19 歳の時に暗殺された。サン=ヴィクトールは 19 世紀まで引き続きリペール・ダロジエ家が所有することになるが、それも同家のユジェーヌ・ルイ・プロスペール（Eugène Louis Prosper、1887 年没）が最後となった。カステラスについてはその後、サン=ヴィクトールの住民の手に渡るものの、現在はコミューンの所有となっている。

最初に述べたように、カステラスのある山は、中世には麓の集落から山頂の城塞まで四重の城壁で守られていた。カステラスへの登り口がある一番下の（北側の）城壁は、旧集落（vieux village）と現在のサン=ヴィクトール=ラ=コストの住宅地の境をなすものであるが、その城壁の遺構を利用する形で、サン=ヴィクトール教会（église Saint-Victor）が建てられている。西ファサードとその北角に建つ背の高い円塔も 12 世紀の城壁の名残である。以前からあったサント=マドレーヌ教区教会（後述）の傷みが進んだこともあって、17 世紀になって新しく教区教会を建設することとなった。工事は 1665 年から始まり、1699 年には後陣とトランセプト作られ、全体がほぼ形をなした 1700 年に献堂された（ただし身廊部などの建設工事が終わったのは 1712 年）。1723 年（または 1724 年）には北西角の 11 世紀の円塔の高さがかさ上げされ、さらに 1739 年になってその上に鐘楼が増築された。この円塔は« tour de l'Oume »と呼ばれ、13 世紀以来サン=ヴィクトールのコンシュラが置かれていたが、17 世紀からは監獄として使われるようになった。18 世紀半ばにはこの聖堂の北東に聖具室と司祭館が作られた。聖具室と内陣の間にある出入口は、かつてのメインの扉口（18 世紀）であった。

サン=ヴィクトール教区教会の建設工事は、1760 年には一応の完成を見たが、19 世紀（1809 年）になって西ファサードにメインの扉口が開けられた（最初にそれが開けられていたのは北面の壁であった）。扉口の左右の幅のある方形のイオニア風ピラストルの上に扁平アーチが架かる。ポルタイユの上には大きな丸窓（19 世紀）が 1 つ開けられ、ステンドグラス（馬に乗った聖ヴィクトール）がはめられている。内部は 3 ベイからなる単身廊で、東西の長さは 35 メートルである。各ベイの上には交差リブ・ヴォールトが架かる。また各ベイの間には、外壁に付けられた扶壁と対応する形で横断アーチが架かる。西端のベイにはトリビューン（19 世紀）が作られている。身廊には 4 つの窓が開けられている。第 3 ベイはトランセプトで、祭室が南

北に 1 つずつ付いている。トランセプトの東は内陣である。主祭壇の後ろには聖ヴィクトールの殉教を描いた祭壇画がある。聖ヴィクトールは、古代ローマ時代の騎士で、290 年頃に殉教したとされる。なお大革命の際にはこの地の司祭たちはいわゆる「聖職者民事基本法」（1790 年）による宣誓を拒んだことで村人から迫害を受け、ある者はイタリアに逃れ、ある者は殺された。

サン=ヴィクトール教会からカステラスに向けて少し登ると、第 3 の城壁に沿う形でかつてのサント=マドレーヌ教会（église Sainte-Madeleine）の遺構がある。17 世紀まではこのサント=マドレーヌ教会がこの地の教区教会であったが、新たにサン=ヴィクトール教会が建設されると使われなくなり、その後は放棄されたまま今日に至っている。東端に方形の鐘塔（最上部の四方に鐘をつるす半円頭形のベイが 1 つずつ開く）と、その西側に半ば崩落した身廊の壁面が立っている。不整形の石を不規則に並べて積まれた北壁と西壁が比較的よく残っているが、そこには方形の窓が壁の上部に何カ所か開けられているだけである。東端は鐘塔なので、通常見られるような半円形の後陣はない。建築自体は 12 世紀にさかのぼるとも言われるが、全体的にロマネスク的な雰囲気は感じられない。

さらに山の斜面に付けられた歩道を 250 メートルほど登るとカステラスの北側の城壁に出る。この城塞はおおよそ北側に向けて弧を描く半円形をしており、南側の城壁は直線である。内部の広さはおよそ 1500 平方メートルある。中央の内庭を北側で取り囲むように建物の遺構が並んでおり、そのうち北から西にかけてのものは居館で、最も西側のものは 1509 年の記録によれば大広間（Grand Salle）である。一方、内庭の東側は馬小屋（厩舎）などであったと思われる。内庭の南側には何もない。

城塞礼拝堂（chapelle castrale）は南西角にある。建設は 12 世紀で、カステラスのうち 1249 年の破壊を免れた恐らく唯一の建造物で、したがってサブラン家の時代にまでさかのぼる最も古い部分である。小山の上にあって、礼拝堂の建物が城塞の城壁の一部として建てられている様子は、例えばオムラス（Aumelas、エロー県）の城塞礼拝堂とよく似ている。ただしオムラスではその後陣は半円形であるが、ここサン=ヴィクトール=ラ=コストでは方形（平面形）である。上階が増築されていて、いわばこの城の主塔となっている。その高さは 12 メートルで、壁の厚さはおよそ 1.1 メートルある。カステラスの城壁を兼ねている礼拝堂南側の外壁には高さの低い扶壁が 3 ヶ所に付けられている。

礼拝堂内部は 2 ベイからなる単身廊のシンプルな方形をしている。内寸 8×5m の長方形で、中石材による石積みで建てられている（ただしそれほどきっちりとした切石ではない）。天井は半円筒形トンネル・ヴォールトで中央にベイを分ける横断アーチが架かる。この横断アーチは近年になって修復された新しいものである。身廊側壁には各ベイに二重になった半円形の壁アーチが並んでいる。このように二重になった側壁のアーチの例は、この地方ではバニョル=シュル=セーズのサン=マルタン=ドゥ=サデュラン礼拝堂（Saint-Martin-de-Saduran［30.1.14c］）や、サン=ポール=レ=フォンのサン=タンドレ=ドゥ=セヴァヌ礼拝堂（Saint-André de Sévanes［30.1.22］）などに見られるもので、いずれも 12 世紀に建設されたものと考えられる。この壁アーチの上には水平のコーニスが付けられており、そのままヴォールトに

架かる横断アーチのインポストとなっている。

窓は西壁と東壁に開けられており、西壁のものは縦長の方形で、隅切りされていない。反対側の東壁（後陣）のものは内部と外部の両方に向けて隅切りされている。この窓は外壁にあっては赤い砂岩の枠組みが付けられている。その枠組みのうち、半円形の頭部は一枚岩のモノリスであるが、放射状に縦溝が付けられている。また下辺部は« V »字形をしている（こうした例は非常に珍しい）。なおこの壁面の上に増築された部分にも小さめの半円頭形の窓が開けられている。

30.1.24a　Chapelle castrale du Castellas.

出入口も 2 カ所あり、1 つは西壁に大きなものが、もう 1 つは北壁に小さめのものが開けられている。北側の出入口がもともとのもので、かつては城塞の大広間と礼拝堂の間を直接行き来できるようになっていた。西側の出入口は後から開けられたものである。

凱旋アーチ（勝利アーチ）は側壁のアーチとほぼ同じ大きさであるが、ヴォールトまでの縦幅はかなりある。その下にある内陣は、東西幅が 2 メートルしかなく、壁アーチと同じ大きさの半円アーチがその上に架かる。現在は、平面形の後陣の壁に接する形で石の祭壇が設置されている。その祭壇のすぐ上が隅切りされた窓である。その窓の、向かって斜め左上（凱旋アーチの左部分）にも、小さな方形の開口部が見られる。これは礼拝堂建設時にはなかったものであろう。なお、E. Pelaquier によれば、上階に登るための小さな扉口が下の礼拝堂内部にあるとのことであるが、2014 年 3 月に筆者がここを訪れた時には確認できなかった。西のベイの南側の壁にそれらしきものの痕跡は認められたが、完全に壁の中に埋められてしまっており、したがって下の礼拝堂内部から上階に登ることはできなかった。

Duclaux（1999）pp. 178–180; Goiffon（1881）pp.350–351; Pelaquier（1984）pp.3–16; Pérouse de Montclos（1996）p.523; Nemausensis.com; RIP.

30.1.24b　サン=ヴィクトール=ラ=コスト／サン=マルタン礼拝堂（Chapelle Saint-Martin, Saint-Victor-la-Coste）遺構

サン=ヴィクトール=ラ=コストの村役場から県道 D240 を北へ 1.5 キロで D145 と交差する。それを西へ約 600 メートル行くと、道路の北側すぐのところにサン=マルタン礼拝堂遺構の鐘塔が現れる。タルヴ平野の田園のただ中である。ローヌ渓谷に沿ってアルバとニームを結んでいたローマ時代の街道に近いこの場所には、古代には異教の聖域（墓地や神殿）があった。サン=マルタン礼拝堂の最初の建設について知りうる史料は見出せない。現在遺構が残る礼拝堂の建物は、後陣の下半分や鐘塔の下段の古い部分と、後陣の上半分および鐘塔の上の 2 つの段の新しい部分に分けられ、L.-H. Labande は前者が 1050 年頃あるいは 11 世紀前半、後者が 12 世紀のものとしており、P. A. Clément もそれに従っている。ただし A. Borg はそれを誤りとし、

前者についても 12 世紀後半のものであると主張している。しかし筆者の見るところ、古い部分については少なくともやはり 11 世紀後半までさかのぼるものであると考えるのが妥当であろう。

サン=マルタン礼拝堂の名前が史料に現れるのは 9 世紀末になってからのことである。11-12 世紀にはこの聖堂の周囲に集落があり、この場所で地元の市が開かれていた。この市はアルビジョワ十字軍の時代、1223 年に国王ルイ 8 世の命によりバニョル=シュル=セーズに移された。その影響もあって、サン=マルタンは次第に寂れてゆく。18 世紀に新たにサン=ヴィクトール教会が建設されるとまったく使用されなくなり、ついには放棄され建物の崩落が進んだ。現在はコミューンの所有となって遺構の保存が行われている。

この聖堂は、高さのある方形の鐘塔とそれに接して建つ半円形の主後陣（このサン=マルタンの遺構については、通常の「後陣」の内側に小後陣が並ぶため、唯一残るこの後陣を以下では「主後陣」と呼ぶこととする）が残るのみで、この主後陣の西に続いていた身廊部は鐘塔の下の部分以外はすべて失われている。単身廊形式で、側廊やトランセプトはなかったと考えられている。方形の鐘塔は 3 段からなる。各段は二重のコーニスによって区切られており、その大きさは上に向かうほど少しずつ狭まっていく。最も高さのある下の段（1 階部分）は小石材が平積みされており、南東角は隅石（chaînage d'angle／quoin）が積まれている。南面にごく小さな開口部が見られる。下の段よりも 1 世紀ほど後に建て増し（もしくは改修）されたと思われる上の 2 つの段には、各面に半円頭形で縦長のベイが開く。その頭部の半円アーチは二重のアーキヴォルトとなっている。

主後陣の東端および北と南に小さな窓が開けられているが、破損が進み窓枠も失われている。また主後陣の上のドーム（天蓋）部分も崩落してしまっている。この半円形の主後陣の内側にはやはり半円形の小後陣がアーケードのように 3 つ並び、それはあたかも三つ葉形のようである。このような形はオーヴェルニュからの影響であろうか。これらの小後陣にはそれぞれ半円形で水平のコーニスが巡り、その上に小さな半ドームが載る。その半ドームは二重のアーキヴォルトを伴っている。これら 3 つのアーキヴォルトはそれぞれ逆台形型の冠板を介して、柱頭を持つ小円柱が受け止めていたと思われるが、現在それらの小円柱はすべて失われていて、基壇の上のトルス（トーラス）および冠板と柱頭のみが残されている。それらの柱頭にはアカンサスや動物の頭などの彫刻が施されている（ただし摩耗が進んでいる）。小後陣の石積みはコーニスの上と下では異なり、下は小石材がそれほど精緻に積まれてはいないが、コーニスから上は切り整えられた中石材がきっちりときれいに積まれている。半ドームのアーキヴォルトも同様である。そのアーキヴォルトの上には主後陣全体を横断する形で水平のコーニスおよび歯車形の装飾帯が巡らさ

30.1.24b　Saint-Martin de Saint-Victor-la-Coste.

れている。主後陣のこの上部は、12 世紀後半に改修されたものと思われる。

主後陣を巡るコーニスは凱旋アーチの側柱を経てそのまま身廊へと続いている。なお凱旋アーチを受け止めていた左右両側の側柱は、3 つの小後陣を受け止める小円柱（およびそれが付けられている方形のピラストル）の一番外側のものの上に二段構えになって載る形となっている。この形は例えばドローム県のドンゼール（Donzère）などにも見られるものである。ただしドンゼールでは凱旋アーチの起拱点に柱頭はない。このサン=マルタンでは凱旋アーチを受け止める上段の側柱のうち、向かって右側（つまり南側）の付け円柱には渦巻きを伴う植物彫刻の施された柱頭が残されている（左側のものは失われている）。この側柱を受け止める下段の付け円柱は 1 つの柱頭を共有する 2 本組となっている。こうした仕様は低ラングドック地方では珍しいものであるが、残念ながら柱身は 2 本とも失われている。残された柱頭には左右に広がる植物の渦巻きの間に、左右に角を伸ばす平たい羊の頭が彫刻されている。

鐘塔の北側の身廊に面した部分は、主後陣の西に接する幅の狭い内陣とも言える（ヴォールトが一部分残っている）。鐘塔の下には幅 1.2 メートル、奥行き 1.35 メートルのわずかに尖頭形となった大きなベイが開いている。かつては鐘塔に登るための石段があったのであろうか。しかし登り口などはそのベイの内部には見当たらない（東側には大きな方形のニッチがある）。天井部分に大きな穴が開けられていて、かつてはそこから鐘を鳴らすために繋がれたロープが下ろされていたのではないかと思われる。その内陣部の西端（つまり鐘塔の北西角）には身廊のヴォールトに架かっていた横断アーチの痕跡と、それをピラストルのコーニスのところで受け止める方形のモディヨンが残されている。そのピラストルの土台部分には、横倒しにされた古代の墓石が礎石として利用されている（ヴェゾン=ラ=ロメーヌ大聖堂後陣の土台部分を連想させる）。かつてこの場所が古代の聖域（墓地や寺院）であったことをうかがわせるものである。

Baligant（1980）p.25; Borg（1972）p.93; Clément（1993）pp.272-274; Labande（1902）pp.202–206; Lassalle（1970）p.14, p.59, planche XIII; Base Mérimée; RIP.

30.1.24c　サン=ヴィクトール=ラ=コスト／ノートル=ダム・ドゥ・メラン礼拝堂（Chapelle Notre-Dame de Mayran, Saint-Victor-la-Coste）

サン=ヴィクトール=ラ=コストのコミューン域の東端に位置する。村役場から県道 D101 を東へ 1.2 キロ行くと D145 と交わるので、« L'Ermitage de Mayran »の標識に従ってそのまま « chemin de Mayran »を直進すると、およそ 800 メートルで、ブドウ畑に囲まれたノートル=ダム・ドゥ・メラン礼拝堂がその姿を現す。

古代ガロ=ローマ時代からこのあたりには大きなヴィラがあった。20 世紀になって行われた発掘によってワインの壺や地下導水路などが見つかっている。また礼拝堂の南側には、古代後期から中世にかけての 1800 ㎡にも及ぶ広い墓地があり、1300 もの墓地があった。また聖堂内外の壁面において 2 世紀頃の古代の墓石が再利用されて埋め込まれているのが見つかっている。9 世紀にはこの地に小修道院（プリウレまたはエルミタージュ）があり、マルセイユのサ

ン=ヴィクトール修道院がこれを所有していたとされる。896 年のルイ盲目王（Louis l'Aveugle）の寄進文書の中にその名« Marianum veterem »が出てくる。また教皇パスカリス 2 世の 1113-1114 年の教書ではアヴィニョン司教区の« S Maria de Mirano »と記されている。時代が下って 17 世紀になると、ペスト禍や干ばつの難儀から逃れることを祈願して巡礼がやって来るようになった。大革命まではユゼスの司教座聖堂参事会の管理の下にあったが、18 世紀になるとメランの土地は分割されてしまい、19 世紀には隠修士が礼拝堂の周囲のわずかばかりの荒れた土地に住む寂れた場所になっていた。最後の隠修士は 1915 年に亡くなっている。礼拝堂は現在、サン=ヴィクトール=ラ=コストのコミューンの所有となっている。

現在残る礼拝堂の建物は 11 世紀または 12 世紀に建設された。長い歴史の中で何度か改修されているが、大がかりなものは 18 世紀から 19 世紀にかけてのもので、最近では 1972 年に修復工事が行われている。平面プランはラテン十字形である。西ファサードは、近代の改修を経たもので、半円頭形のシンプルな扉口が開き、そのすぐ上には 1768 年に置かれた聖母マリアの飾り彫刻がある（ただし破損が進んでいる）。聖母は 2 人のひざまずいた修道士らしき人物に挟まれて両手を広げて立ち、その頭からは光が四方に放たれている。西ファサード上部の切妻の中央には大きな丸窓が開けられている。このファサードは身廊の北側に接する小修道院の 3 階建ての建物と連続している。その建物の北側には丸い井戸が残されている。

ロマネスク期の雰囲気を最もよく伝えるのが後陣側の姿である。高さのある半円形の主後陣とその左右両側にそれよりも少しだけ低い小後陣が並ぶ。主後陣の東端の窓は現在は埋められているが、左右の小後陣には外側に向けて隅切りされた半円頭形の窓が開く。主後陣のすぐ西側、すなわち交差部の上には八角形のクーポールが立つ。このクーポールは 19 世紀に崩落し、その後再建されたもので、装飾の類いは何もない見られない。クーポールの上には近代になって造られた円筒形の鐘塔が立ち上がる。この鐘塔の上部には歯車形の装飾帯が二重に巡っている（部分的に破損）。この鐘塔の一番上には 1848 年に聖母マリアの立像が据えられた。

礼拝堂の壁面は、トランセプトの角石や小後陣の窓枠などを除くと、さまざまな形の不整形の石による荒積みである。南側のトランセプトの南西角には、半円形の日時計が線刻された石がいくつもはめ込まれている。南北のトランセプトにはそれぞれ横幅はあるが厚さのない扶壁が付けられている。身廊は上部が後の時代にかさ上げ（増築）されており、身廊南側の外壁を見ると、石積みの仕様が異なる上下の部分の境がはっきりと分かる。かさ上げされた部分にはかつては半円頭形の窓が並んでいたが、現在は埋められており、その痕跡だけが残されている。その下のもともとの外壁にはところどころに小さなニッチが付けられている。また身廊南側外壁の東端下部には半円形の大きなニッチが見られる。この南壁にはかつては出入口が開けられていたようである

30.1.24c　Notre-Dame de Mayran.

が、今は埋められていてその痕跡も残されていない。

礼拝堂の内部は単身廊形式である。その南北幅は広くはない。身廊の天井はかつては木造であった。L. Alègre が 19 世紀半ばに描いた堂内のデッサンではまだ木組みの天井であるが、その世紀の末頃に半円筒形のヴォールトに架け替えられた。身廊の壁面はすべてモルタルで上塗りされている。トランセプトの西側には半円形の横断アーチが架かる。身廊の南側にはかつて開けられていた出入口が残されているが、今は外側が埋められていて内側はニッチである。反対側（北側）の壁にもそれより小さなニッチがある。もともとは壁の中に埋められていたものであるが、最近になって再びニッチとして復元された。この身廊部南側の壁の上部にも、かつて並んでいたと思われる半円形の壁アーチの名残が復元されて残されている。

ほぼ正方形で半円形のアーチで囲まれた交差部の上は、四隅の扇形のトロンプの上に八角形のクーポールが載る。南北のトランセプトには半円筒形ヴォールトが架かる。主後陣は半円形で身廊部から巡るコーニスの上に半ドームが架かる。この半ドームは青く彩色され、星の絵がちりばめられている。かつて東端に開かれていた窓は埋められており、今はゴシック風の縁取り装飾が施されたニッチとなっていて、そこに聖母子の像が置かれている。左右の小後陣も半円形で、南北ともに 19 世紀の彩色画が描かれている。

Baligant（1980）pp.22–25; Clément（1993）pp.156–157; Labande（1902）pp.206–207, planche XXII; Provost et al.（1999）pp.658–662; Vidal et Petitot（2012）p.108; Base Mérimée; RIP.

30.1.25　プジアック／サン=プリヴァ教会（Église Saint-Privat, Pouzilhac）遺構

バニョル=シュル=セーズから県道 D6086 を南へ 15 キロである。村には最初 12 世紀に建てられ、19 世紀に改築された中世風の城がある（個人所有）。北から村に入る 800 メートルほど手前に墓地があり、サン=プリヴァ教会の遺構はその中にある。古くからローヌ渓谷に沿ってアルバとニームを結んでいたローマ時代の街道沿いに位置していた。建設されたのは 12 世紀前半である。ここには古代から墓地があったため、この聖堂の柱などにも古代の墓石が利用されたりしている（ただしその石は中世のものであるとの見方もある）。もともとはユゼス司教が管理する小修道院の付属聖堂であったが、1164 年にヴィルヌーヴ=レ=ザヴィニョンのサン=タンドレ修道院（Abbaye Saint-André de Villeneuve-lès-Avignon）に譲られた。その後の歴史は不明な点が多い。この聖堂が捧げられている聖プリヴァトゥス（サン=プリヴァ）はジェヴォーダン（おおよそ現在のロゼール県にあたる）の司教で、3 世紀後半、ローマ皇帝ウァレリアヌスの治世下で殉教した。この聖人の墓はマンド大聖堂の地下クリプトにあり、ロゼール県には彼を守護聖人とする聖堂が少なくない。

建物は内陣部を含めて 4 ベイからなる単身廊形式で、東端に半円形の後陣が続く。身廊外壁は南側において、細長い扶壁（下半分は失われている）をはさんで東の 2 つのベイと西の 2 つのベイではかなりその様相が異なる。東の 2 つのベイは切り整えられたさまざまな大きさの石材（中～大石材が多い）がきれいに積み重ねられている。最も東の内陣部の外壁は 2 メートル近い幅のある扶壁となっている。一方、身廊の西半分は不整形の石（小～中石材）が荒積みさ

30.1.25　Saint-Privat de Pouzilhac.

れており、この荒い壁面は西ファサード（開口部などはない）から身廊の北側まで続いている。まるで身廊東側のようなきれいな壁面が削げ落ちてしまったかのような光景である。しかし半円形の後陣部では、実際にきれいな壁面の石積みが北側の下半分を除いて大部分が落ちてしまい、その内部の荒い石積みが露出している。身廊南側の外壁には、現在は中央下部に方形の出入口が開けられている。また小さめの開口部が 3 ヶ所ある。そのうち中央の出入口の左右の斜め上に開けられた窓の、向かって右側（東側）のものは縦に細長く、頭部は方形の一枚石に半円形の扇形彫刻が施されている。内側のひねり紐文様のモールディングから光が放射状に広がるような装飾である。向かって左側（西側）の開口部は頭部の方形の一枚石だけが残されており、同じように半円形の扇形彫刻が見られるが、こちらは単純な線刻のみである。また身廊南側の外壁には、西寄りの下の方に、聖杯とブドウの房が浅浮き彫りされた石板が埋め込まれている。正確な年代は不明であるが、同じようなモチーフが彫刻された石板は、例えばヴェゾン=ラ=ロメーヌのサン=クナン礼拝堂西ファサードの扉口の上に見られ、初期キリスト教時代の 5 世紀頃のものとされるので、ここサン=プリヴァの石板も同じくらい古いものかも知れない。

4 ベイからなる聖堂内部は、身廊の南北の側壁に半円形の大きな壁アーチが並ぶアーケードとなっている。南側のものが比較的保存状態がよいが、それでも下半分は失われていて壁面内部の土が露出している。外壁と同様に、東側の 2 つのベイの壁アーチは切り整えられた石がきっちりと組まれたものである。西側の 2 つのベイでは部分的に残されたアーチ頭部の石組み以外は不整形の石の荒積みであり、壁アーチの大部分やヴォールトを受け止めていた側壁のピラストルなどは失われている。北側の壁アーチを受け止めていたピラストルのコーニスの彫刻は一部が残っていて、特に西から 2 番目のものはひねり紐文様が横に伸びてその上に水平のモールディングを伴った板状の石が載るという形である。南側の壁アーチの中には、内部に向けて大きく隅切りされたロマネスク様式の窓が開けられている。身廊側壁の上部には、南北ともにかつてのヴォールトの起拱点のところに水平のコーニスが付けられているが、これも身廊の西半分と東半分では高さが異なり、西半分のものの方が少し高い位置にある。

この聖堂は、近代になってからは放置されたまま破損も進んで廃墟化し、半ばガラクタ置き場と化していた。1991 年からようやくそうした不用なものが取り除かれたが、それでもやはり建物の傷みは止まらず、現在も雑草に覆われた内部には次第に土砂がたまって荒れ放題という印象が拭えない。歴史的遺構としてよりいっそうの保存・整備の努力が求められる。

Clément（1993）p.280; Labande（1902）p.13; Provost et al.（1999）pp.525-528; Rouquette（1980）p.163.

30.1.26　サン=ローラン=デ=ザルブル教会（Église de Saint-Laurent-des-Arbres）

バニョル=シュル=セーズからローヌ川沿いに走る国道 N580 を南へ 15 キロで県道 D26 を西に折れ、そこからおよそ 1 キロである。村は中世期の円い形を残しており、サン=ローラン=デ=ザルブル教会は、やはり中世の城塞のものであった塔や城壁の遺構とともに、村のほぼ中心に建っている。

この地は、シャルルマーニュの死後ブルゴーニュ王国（別名プロヴァンス王国）の一部であったが、10 世紀頃にはその女領主であったと思われる Eintligarde が、ここから 2 キロ南に位置するリラック（Lirac）の教会とともにサン=ローランの教会をも所有していた。その息子ロドワン（Laudoyn）とその妻エグランラクラ（Eiglenracla）が、919 年にサン=ローランの « villa »と教会をアヴィニョン司教フルク（Foulques II／Fulcherius）に譲渡した。その際の記録が史料におけるサン=ローランの名の初出である。1155 年、教皇ハドリアヌス 4 世はアヴィニョン司教ジョフロワ（Geoffroy、在位 1143-1150 ou 1157）がサン=ローランを司教領（temporel）として所有することをあらためて認めている。1202 年、サン=ローランおよびリラックの土地の一部にいまだ領主権を保持していたサブラン家のロスタン（Rostaing IV、妻は Guillaume des Baux の妹 Almodia des Baux）はアヴィニョン司教で同名のロスタンに臣従している。さらに 1232 年、やはりサブラン家の領主であるエゲーズのギヨーム（Guillaume de Sabran d'Aiguèse）とロスタン（5 世）は、今度はアヴィニョン司教ベルトラン（Bertrand、在位 1230-1239）にサン=ローランの城を売却した。この時、サン=ローラン教会から西へ約 60 メートルのところにあるリバの塔（またはリバスの塔、Tour de Ribas）はサブラン家のものにとどまったようであるが、それも 1255 年に、ギヨームの娘にしてピエール・エルマンゴー（Pierre Ermengaud）の妻であるサブラン家のデカネス（Décanesse de Sabran）が、やはりアヴィニョン司教のゾーン・タンカリーニ（Zoen Tencarini、在位 1239 ou 1240-1261）に売却した。こうして中世の間、歴代のアヴィニョン司教がサン=ローラン=デ=ザルブルの城や教会、そして土地を所有し続けたのであった。

13 世紀半ば以降、アヴィニョン司教たちはサブラン家から引き継いだサン=ローランの城を強化するとともに、教会の改築と要塞化を進めた。中でも教皇ヨハネス 22 世（在位 1316-1334、アヴィニョン司教ジャック・ドゥエーズ Jacques Ier Duèze としては 1310-1313 ou 1316）はとりわけそれに熱心で、彼の時代にサン=ローラン教会は壁の高さがかさ上げされるとともに、狭間や銃眼などの防御設備（créneau）が付け加えられ、城塞の一部に組み入れられることになった。実際、百年戦争期の 1360 年には、横行する傭兵団の襲来に備えてサン=ローランの城塞に守備隊が置かれている。また 1383 年には Tuchins の反乱（Révolte des Tuchins、百年戦争遂行のための徴税に反対した農民がオーヴェルニュで 1363 年から起こした）がラングドックに波及し、蜂起した農民たちはサン=ローランを包囲するが、城塞の堅い守りの前に撤収している。しかし 16 世紀の宗教戦争の際には大きな被害を受けた。1562 年 5 月、ペリネ・パルパイユ（Perrinet Parpaille）に率いられたプロテスタント勢力がサン=ローランを襲って教会を荒らしている。同じ年の 8 月には今度はアドレ男爵（baron des Adrets）の部隊が来襲し、その

際には 80 人もの住民が殺され、司祭も生きたまま焼かれた。家々が燃やされ、教会も再び荒らされた。この時プロテスタント勢力は、1574 年までサン=ローランを支配した。また国王アンリ 4 世の三男であるガストン・ドルレアン（オルレアン公ガストン／Gaston d'Orléans）が 1630-1632 年にラングドックで反乱を起こした際にもサン=ローラン教会は被害を被ったが、その時には村の住民たちによって修復された。大革命に際しては、教会司祭のリオタール（Liotard）が「聖職者民事基本法」（1790 年）による宣誓を拒んで亡命している。1821 年、サン=ローラン=デ=ザルブル教区は、ニーム司教区に編入された。1888 年、身廊部と南側に付属する塔の大がかりな修復が行われたが、ゴシック期の要塞化で隠されてしまったロマネスク聖堂の様子がますます損なわれてしまった。J. Vallery-Radot などはこの時の修復をまさに痛ましい災い（restauration désastreuse）であると非難している。

現在私たちが目にする聖堂は、1150 年頃に建設されたものである。11 世紀半ば頃とする見方もあるが、いずれにしてもプロヴァンス・ロマネスクの影響が色濃く、その同じ時期にプロヴァンスで起こったロマネスクの輝かしい建設ムーブメントがローヌ川の西のラングドックに波及した証であるとされる。12 世紀後半にクーポールが、その後 13 世紀にかけて鐘塔が建てられた。先にも触れたようにゴシック期に入っていた 14 世紀、教皇ヨハネス 22 世の時に要塞化され、身廊の外壁や後陣は、地上からおよそ 16 メートルの高さにまでかさ上げされメルロンなどの防御が施された。基本的な平面プランはラテン十字形で、4 ベイからなる単身廊にトランセプトが続き、その東に主後陣と 2 つの小後陣が並ぶ。身廊の北には 12 世紀後半と 14 世紀の建設時期を異にする 2 つの建物（礼拝堂）が接続する。

壁面は全体的に不整形の小石材が積まれている。西ファサード、身廊の南側の壁面や、身廊北側に並ぶ礼拝室の壁面、小後陣のうちの北側のものに、魚の骨あるいは麦の穂状のヘリンボーン模様（opus spicatum）の石組みが見られる。ローマ建築を想起させるものであるとも言える。同様の石組みは聖堂から少し離れて建つジャック・ドゥーズの塔（Tour Jacques Deuze）およびその塔と聖堂を接続する城壁の壁面にも多数見ることができる。また聖堂の壁面のあちこちには、西ファサードや後陣も含めて足場を組むための小さな穴が多数開けられているのが認められる。

サン=ローラン教会をその西側にある広場側から見た時にまず目に入るのは、要塞化されて高さが加えられた城塔のような方形の身廊と、その南側に寄り添うようにして建てられたやはり方形のカザルの塔（Tour du Casal）である。この塔と身廊南壁の間には約 35 センチの間隙がある。この塔の上半分は 1888 年の改修工事の際に高さが切り詰められて失われた。20 世紀初めの古写真を見ると、この塔は身廊の外壁から完全に離れているが、現在は上部が傾斜した壁でつなげられて

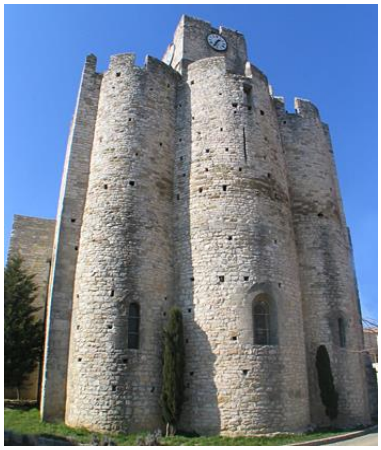
30.1.26　Saint-Laurent-des-Arbres.

いる。塔の壁面は切り整えられた切石がきっちりと積まれたものである（ただしヘリンボーン模様の組石は見られない）。また角石としてボサージュが並べられている。これは 12 世紀から 13 世紀の城塞建築などでしばしば用いられる仕様で、サン=ローランの他の塔には見られない。南面には中ほどの高さのところにかつての方形の出入口が残されている。上辺は横長のリンテルで、さらにその上には長さのあるクラヴォーが 5 つ扇形に並べられている。塔の東面には端の方に細長い銃眼のような窓が開けられ、内部に向けて段々状のヴシュールが連なる形で隅切りされている。この塔は 14 世紀に建てられたとされるが、C. Corvisier などはそれよりもう少し早い時期、すなわち鐘塔の完成（12 世紀後半−13 世紀頃）から教会の要塞化（14 世紀）の間であろうと推定している。また彼は、サン=ローランの他の 2 つの塔がサブラン家のために建てられたのに対して、この塔はアヴィニョン司教のためのものであったのではないかとしている。

次に身廊の北に接する 2 つ礼拝堂であるが、そのうち西側のものが古く、建設は聖堂身廊部と同じ 12 世紀半ばあるいは身廊より少し後の 12 世紀後半のものである。なぜトランセプトから離れて半ば独立するかのようなこうした珍しい位置に礼拝堂が造られたのであろうか？　A. Durand は、この礼拝堂があくまでも城塞に付属した建物であったのだとしている。J. Vallery-Radot もその見方を踏襲し、身廊部の少し後に建設されたものである考えている。一方 C. Corvisier は、この礼拝堂は城塞施設の一部ではなく、聖ローラン（聖ラウレンティウス）以外の別の聖人に捧げられた礼拝室（confession ou martyrium）のようなものではなかったかと指摘している。その位置の問題に関しては、もう 1 つの可能性として、もともとトランセプトから連続する形で身廊に沿ってその北側に 2 つの礼拝堂が建設されたが、東側の礼拝堂が何らかの理由で取り壊され 14 世紀ないし 15 世紀以降に再建されたということも考えられる。この東側の新しい礼拝堂の高さは西側の礼拝室やトランセプトよりも低い。また壁面には細長い銃眼が開けられている。

聖堂の南側外壁には、身廊の西から 2 つ目のベイにあたる場所に、かつて開けられていた出入口の痕跡が残されている。出入口自体は埋められてしまっているが、その頭部は赤いレンガのブロックが半円形に並べられた古代ローマ建築風のアーチである。よく似たアーチの例は、ここから約 6 キロ北東のモンフォコンにあるサン=マルタン=ドゥ=リベリス礼拝堂（chapelle Saint-Martin-de-Ribéris, Montfaucon［30.1.27］）の身廊南側の外壁の下にも見ることができる。サン=ローランでは、同じような出入口の痕跡が身廊の北に造られた礼拝堂の、西側の古い方の外壁の下にも残されている。かつては隣接する城塞に直接通じていたものと思われる。そのすぐ上には半円頭形の隅切りされた窓の名残も見られる。同じ壁面の中ほどの高さのところには、高さを加えられる前の、かつての三角形の切妻の跡が見て取れる。壁面の最上部には細長い銃眼が付けられている。この礼拝堂には西壁の下半分（ヘリンボーン模様の石組みが目立つ）にも古い縦長の窓と、おそらくはそれよりも後の時代に開けられた大きな窓が開けられている。

西ファサードは 14 世紀の要塞化の際に高さが大きく加えられて縦長の方形となった。最上部は銃眼の開けられたメルロンと狭間が並び、一見して聖堂建築と言うよりも城塞のごとくである。ロマネスク期の三角形の屋根（切妻）の線が残されている。その切妻部分の下、丸窓のすぐ上にもヘリンボーン模様の石組みが見られる。扉口は 17 世紀あるいは 18 世紀初め頃のものである。そのすぐ右横にはかつて開けられていた窓のアーチの名残が認められる（さらにその下にはオウム貝の化石の石が埋め込まれていたりする）。この西ファサードには、全面に数多くの足場用の穴が開けられているが、一番上のメルロンのすぐ下には特に大きな穴が 4 つ並んでいる。



30.1.26
Saint-Laurent-des-Arbres, Chevet.

南側トランセプト（翼廊）の南壁には半円頭形の窓と出入口、そして上部に細長い銃眼が開けられている。一方、北側の壁面には高い位置に銃眼が開けられているだけである。

聖堂の東端には主後陣と小後陣が 3 つ並ぶ。この部分もやはり 14 世紀に要塞化された際に地上から約 16 メートルまで高さが加えられたものである。もともとは主後陣が左右の小後陣よりも高かったと思われるが、要塞化された際に、同じ高さでそろえられた。最上部にはやはり細長い銃眼の付けられた方形のメルロンと狭間が並ぶ。中ほどの高さから少し下のところには半円頭形の窓が開けられている。また壁面の下から上まで全面にわたって数多くの足場用の穴が開けられている。19 世紀には後陣部のさらに東側に聖具室が続いていたが、その後撤去されて今はない。

交差部の上に立つ方形の鐘塔は、12 世紀後半から 13 世紀にかけて造られた。水平のコーニスで区切られた三段構えで、真ん中の段は、各面にそれぞれ鐘を吊すための半円頭形のベイが開く。それぞれのベイには三重のアーキヴォルトが架かる。インポストを介してそのアーキヴォルトを受け止める三重の側柱には小円柱は付けられていない。鐘塔の最上段には各面に丸い時計が付けられている。またその時計の上は狭間となっている。鐘塔の西面の最も下の段には、身廊の屋根から鐘塔に登るための長い石段が付けられている。

身廊の西側の屋根の上と、身廊の北に付属する礼拝室のやはり屋根の上、さらに北側の小後陣の屋根の上には、わずかに尖頭形となった横断アーチの列が残されている（ただし地上からは見えない）。身廊には南北方向に 2 つ、北の礼拝室の上には東西方向に 4 つ並び、北側の小後陣の上には、東西方向に 1 つだけ架かる。聖堂が要塞化された際に、上部構造の天井あるいは木組みの屋根を支えるために作られたものと考えられる。

サン=ローラン教会の内部は、身廊が 4 ベイからなる単身廊形式で、その東側にトランセプトと後陣部が続く。身廊部分は 1888 年の改修工事によってその姿が大きく変えられてしまった。身廊南北の側壁には半円形の壁アーチが並ぶ。その中に開けられた窓は、半円頭形で両側

に小円柱が配されているが、言わばネオ・ロマネスクであって、12 世紀のオリジナルのものではない。壁アーチ自体もかつては二重になっていたが今はそうなっていない。また壁アーチの上のヴォールトの起拱点に付けられていた水平のコーニスも失われている。ヴォールトに架かっていたと思われる横断アーチもない。身廊の 4 つのベイのうち、最も西の第 1 ベイは、他のベイよりも東西幅が狭くなっている。

身廊の北に接する西側の礼拝室には、身廊第 3 ベイ北側のアーチ（かつてはニッチの壁アーチだった）を介して接続する。天井は半円筒形ヴォールトである。北側の壁の上部にはパルメット文様のコーニスが付けられている。ゴシック様式で建てられている東側の礼拝堂には、今度は身廊の第 4 ベイにあるアーチ（これもまたかつてはニッチであった）を介して接続する。この礼拝堂の形はほぼ正方形で、西側のものよりも少し大きい。天井は交差リブ・ヴォールトである。この礼拝堂は東側からトランセプトとも行き来ができる。

トランセプトおよび後陣は、身廊の軸線からはわずかに北に向けてずれている。とりわけ見事なでき映えとなっている交差部はプロヴァンス風である。南北方向に長い長方形の交差部の上は、東側が後陣のアーチ、西側が凱旋アーチである。また南北の各辺はトランセプトとの間で大きな半円形アーチで区切られ、そこからそれぞれ内側に向けて半円形アーチが二重に連なって正方形となる。このように長方形の交差部の上を南北辺にアーチを重ねることによって正方形にするやり方は、プロヴァンスではアヴィニョンのノートル=ダム=デ=ドム大聖堂やアプトのサン=タンヌ大聖堂、あるいはマルセイユの旧ラ・マジョール大聖堂などにおいても見られるものである。正方形の四隅に付けられた円錐形（あるいは扇形）のトロンプの上に八角形のクーポール（12 世紀半ば）が載り、さらにその上には鐘塔が立つ。クーポールを受け止めるトロンプには『ヨハネの黙示録』などに出てくる 4 つの生き物（福音書記者のシンボル）が彫刻されている。天使（マタイ）、ワシ（ヨハネ）、マルコ（ライオン）、雄牛（ルカ）である。このようにクーポールを支えるトロンプに福音書記者を表す 4 つの生き物が彫刻される例は、やはりローヌ川左岸のプロヴァンスに多い。アヴィニョン、カルパントラ、カヴァイヨン、ル・トール、マロセーヌ（ノートル=ダム=ドゥ=グロゾー）、さらにはアルデッシュ南部のヴィヴィエ大聖堂鐘塔部 2 階のサン=ミシェル礼拝堂などであるが、とりわけエクス=アン=プロヴァンスのサン=ソヴール大聖堂のそれ（現在の主身廊の南側に延びるロマネスク期の身廊の西から 4 つ目のベイ）は、4 つの生き物の彫刻された姿が図柄的にも酷似している。サン=ローランとエクスのものは、年代的にもほぼ同じ 12 世紀半ばであるが、どちらが先かということに関してははっきりしたことは言えない。

サン=ローランのクーポールには、四隅のトロンプからドーム中央の丸い開口部に向けて、植物文様の柱頭彫刻を持つ 4 本の壁付き小円柱が延びている。クーポールのドームに平たいピラストルを放射状に付ける例は、これもまたプロヴァンスにおいて時おり見られるものであるが、平たい方形断面のピラストルではなく半円形断面の壁付き小円柱が、しかも柱頭彫刻を伴って付けられているという例は多くはない。ヴォークリューズにあるル・トールのノートル=ダム=デュ=ラック教会（Notre-Dame-du-Lac du Thor）の場合も半円柱ではあるが、その数は 8 本で、しかも柱頭彫刻はない。サン=ローランのようにその数が 4 本というのは、V. Lassalle に

よると、明らかに黙示録の 4 つの生き物の彫刻された四隅のトロンプに対応していて、そうしたシンボリックな意味は、エクスなど他の例には見られないという（V. Lassalle は、リヨンの Saint-Martin d'Ainay 内陣の柱頭彫刻との関連を指摘している）。またこの 4 本の円柱は、下から見上げる時、あたかも天上に掲げられた大きな十字架を想起することも可能である。

トランセプトの東に並ぶ主後陣とその左右の小後陣は、それぞれ半円形で、内部に向けて隅切りされた半円頭形の窓が開けられている（主後陣の窓のみ、外部に向けても隅切りされている）。窓の上には水平のコーニスが付けられ（主後陣のみ）、その上には半ドームが架かる。半ドームは小後陣も含めてすべて漆喰で上塗りされており、壁面の石組みなどは見ることができない。

サン=ローラン=デ=ザルブル教会の西に建つ方形の強力なジャック・ドゥーズの塔（Tour Jacques Deuze）は、城塞全体の主塔（donjon）でもあった。ゴシック様式の窓と、その上にマシクーリ（出狭間）を支えていた石造コーベルが並び、さらに最上段には防御設備として、三隅に円筒形の物見台が張り出し、さらに方形の小塔が北東角に 1 つ立ち上がる。この塔のおよそ下半分が 12 世紀後半のロマネスク期のもので、上半分は教皇ヨハネス 22 世の時代のものである。東面の下に開けられた出入口の上には大きなリンテルが置かれているが、さらにその上の半円形タンパンには、聖ラウレンティウスが彫刻されている。この図柄はコミューンの紋章にもなっているものである。

Clément (1993) pp.98-100; Corvisier (2000) pp.311-327; Durand (1892) t.1, pp.17-56; Durand（1899）pp.261-266; Goiffon（1881）pp.315–316; Guillemain（1966）p.620; Lassalle（1970）p.41 et planche VII; Lassalle (2003) pp.225-231; Nougaret et Saint-Jean (1975) pp.45-46; Pécout（2006）p.29; Robin（1999）pp.110-114; Vallery-Radot（1963）pp.244-256; Werth（2013）pp.108-109; RIP.

30.1.27　モンフォコン／サン=マルタン=ドゥ=リベリス礼拝堂
（Chapelle Saint-Martin-de-Ribéris／Saint-Martin-du-Jonquier, Montfaucon）

モンフォコンの村は、サン=ローラン=デ=ザルブルから北東へ約 6 キロ、ローヌ川と国道 N580 の間に位置する。ロクモール（Roquemaure）からは北西へ 4 キロである。村の東端のローヌ川沿いにある小丘（colline de Saint-Maur）の上には、最初は 11 世紀に建てられ 19 世紀になって大部分が再建されたという城があってこの村を見下ろしている。村役場からその丘の東側を北西に向かって延びる« chemin de la Tuilerie »を 1.5 キロほど行くと、ローヌ川を背にした林の中に、まるで時の流れに取り残されたかのようにぽつんと建つサン=マルタン=ドゥ=リベリス（またはリベリ）礼拝堂に至る。別名をサン=マルタン=デュ=ジョンキエ礼拝堂と言う。ここはローヌ川に沿ってモンフォコンと 5 キロ北のラルドワーズを結ぶルート上に位置し、またローヌ川をはさんではカドゥルースのサン=マルタン=デ=リビエ小修道院（prieuré Saint-Martin-des-Ribiers de Caderousse）とも古くから行き来があった。

建設は 10 世紀にまでさかのぼるとされる。教皇ゲラシウス 2 世（在位 1118-1119 年）がヴ

ィルヌーヴ=レ=ザビニョンのサン=タンドレ修道院の管轄下に置いた小修道院礼拝堂であった。13 世紀から 14 世紀にかけて、後陣の高さががかさ上げされるなど改築工事が行われている。ローヌ川に近いため、川が増水して氾濫した際には、礼拝堂は近隣の村の住民の避難場所にもなったようである。20 世紀も第二次大戦までは聖マルティヌスの祝日（11 月 11 日）の他、年に何度かはミサなどが行われていた。また皮膚病を患う幼児の治癒を願う巡礼なども訪れた。親たちは奉納品（ex-voto）として子供のかぶり物を納めたという。しかし戦後は次第に訪れる者もいなくなり、放置されていた。身廊や後陣の屋根には雑草や樹木が生え、鐘楼も一部崩壊し、廃墟化の心配もあったが、2013 年 6 月に地元の愛好家たちによる保存会が作られ、外壁（特に北側）、屋根、後陣のヴォールト、内壁のフレスコ画の修復などが行われた。

礼拝堂は 3 ベイからなる身廊に半円形の後陣が付くというシンプルな形である。壁面は身廊部の角石を除いて、全体的にさまざまな大きさの不整形の石が荒積みされている。外壁に扶壁はなく、内部においてもそれに対応する横断アーチは見られない。身廊南側の外壁には、東端の下に半円頭形の出入口が開けられている（筆者が最初に訪れた 2014 年の時点では埋められていたが、その後元通りに開通した）。アーチ部分がその下よりも大きく、そのアーチには赤いレンガが並べられている。これはサン=ローラン=デ=ザルブル教会［30.1.26］の身廊南側外壁にも見られたものである。モンフォコンでは、この出入口の向かって左の、身廊の中央あたり（内部では西側のベイにあたる）に、やはりかつて開かれていたが今は埋められてしまった出入口の痕跡が認められる。アーチの石組みだけが 3 つ重なって残っている。壁面にはその他に、これもまた埋められてしまった窓の跡が 3 ヶ所残されている。

東端の半円形の後陣外壁には、元の部分とかさ上げされた部分が、石積みの様子の違いからはっきりと識別できる。その境目には横長の石と小さな方形の石を交互に並べた水平の帯が作られているのが分かる。同じような帯は身廊の南北それぞれの外壁にも認められる。後陣の東端には外側に向けて大きく隅切りされた半円頭形の細長いロマネスク様式の窓が開けられている。凱旋アーチ部分にも、高さがかさ上げされる前の三角形の切妻の痕跡が認められる。その切妻の線の下には半円形の大きな窓が開けられている（後陣がかさ上げされる前は丸窓であったのかも知れない）。

西ファサードは、やはり建設当初よりも高さが加えられており、かつての三角形の切妻の痕跡が残されている。下には多少形が崩れてはいるが、半円頭形の扉口が開き、その上には隅切りされた半円頭形の窓が付けられている。また足場を組むための小穴もところどころに開けられている（これは後陣の壁面にも見られる）。鐘楼は小さな方形で、各面に半円頭形のベイが開く。凸凹形の水平のコーニスの上は小さなピラミッド形の塔頂部となっている。トレスクのサン=ピエール=ドゥ=カス

30.1.27　Saint-Martin-de-Ribéris.

トル礼拝堂［30.1.18c］あるいはジョンキエール=サン=ヴァンサン（Jonquières-Saint-Vincent）のサン=ローラン礼拝堂の鐘楼と同じタイプのものである。

礼拝堂内部は 2 ベイからなる単身廊形式である。天井は半円筒形のトンネル・ヴォールトである。横断アーチはないが、南北の側壁にはインポスト（部分的に歯車文様が彫刻されている）を伴った壁アーチが 2 つ並び、そのアーチが架かるピラストルによってベイが分けられる。横断アーチを架ける必要がなかったのは、身廊の幅が狭く約 4 メートルしかないためであろう。南側の 2 つの壁アーチにはそれぞれ内部に向けて隅切りされた窓があるが、隅切りのみ残されて窓自体は今は埋められている。またヴォールトの起拱点に付けられていた水平のコーニスも、身廊と後陣の壁をおよそ 1 メートルかさ上げした際に失われたと思われる。後陣は半円形で、半ドームが架かる。身廊側の壁面と後陣の壁面に彩色されたフレスコ画が部分的に残っている。描かれた正確な年代は分からないが、後陣に見られる柱や植物柄のコーニスの絵は 16–17 世紀以降のもの、また身廊部、特に北壁東側の壁アーチに残されたキリストの受難と思われる絵はそれよりも古く、12–13 世紀以降のものと推定される。南壁の同じ場所には、福音書を手に持った人物が描かれているが、顔の部分は失われている。

なお近隣の住民によると、20 世紀初め頃まで、このあたりにはもう一つ別の礼拝堂があったが、ローヌ川の氾濫によって流されてしまい、現存しないとのことである。E. Goiffon が記すところのサン=ジュネ=ドゥ=ミマルノ（Saint-Genest-de-Mimarno）がそれであろうか。また城の建つ丘の南側のすぐ下には、やはり古い聖堂が残っている。村役場の北にある新しいモンフォコン教会が 19 世紀に建てられる前までは教区教会であった。現在はまったく使われず、廃屋のような状態である。建てられたのは 16 世紀のようであるが、先に紹介したサン=マルタン=ドゥ=リベリス保存会によると 13 世紀半ば頃までさかのぼるものかも知れないとのことである。

Bardy et al.（1966）pp.89-90; Clément（1993）pp.96-97; Goiffon（1881）p.181; *ML*, 2018.3.14; GV; RIP.

略記号と参考文献

（各聖堂のビブリオグラフィーでは、文献などは和書、欧文文献、Web-site の順に、また GV と RIP は最後に記した）

AR：*L'Archéologue.*

GV：Guide de Visite.

ML：*Midi Libre.*

RIP：Renseignements ou Informations sur Place.

プリニウス（2012）：『プリニウスの博物誌－第 1 巻～第 6 巻』中野定雄・中野里美・中野美代訳、雄山閣。

Alègre, Léon（1866）: « Le Camp de César de Laudun », in *Mémoires lus à Sorbonne dans les Séances extraordinaires du comité-impérial des travaux historiques et des société savantes,* Imprimerie Impériale, pp.113−121.

Ardagna, Yann, et al.（2010）: « Aux marges de l'ancienne agglomération antique du Camp de César : Saint-Jean de Todon alias Saint-Jean de Rousigue（Laudun-L'Ardoise, Gard）», in *Archéologie du Midi médiévale*, Tome 28, pp.161−180.

Baligant, S（1980）: « Prieuré de Mayran et Chapelle saint-Martin à saint-Victor la Coste » , in *Sites et Monuments*, no.90, Société pour la Protection des Paysages et de l'Esthétique de la France, pp.22-25.

Bardy, Benjamin, et al.（1966）: *Dictionnaire des Églises de France, IIc, Cévennes−Languedoc Roussillon*, Paris, Robert Laffont.

Borg, Alan（1972）: *Architectural Sculpture in Romanesque Provence*, Oxford, Clarendon Press.

Charmasson, Jean（1977）: *Le Camp de César dans la vallée du Rhône antique : un site prestigieux*, Bagnols-sur-Cèze, Éditions de la Sabranenque.

――――――（1989）: *Le camp de César de Laudun（Gard）*, Bagnols-sur-Cèze, Société d'Étude des Civilisations Antiques Bas-Rhodaniennes（S.E.C.A.B.R.）.

――――――（1999a）: « Le village médiéval de Saint-Vincent sur l'oppidum de Gaujac（Gard）. Carriers et tailleurs de pierre », in *Rhodanie*, no.72, Bagnols-sur-Cèze, Société d'Étude des Civilisations Antiques Bas-Rhodaniennes（S.E.C.A.B.R.）, pp.16−31.

――――――（1999b）: « Une église "Wisigothique" sur l'oppidum de Saint-Vincent à Gaujac（30）? » , in *Rhodanie*, no.72, Bagnols-sur-Cèze, Société d'Étude des Civilisations Antiques Bas-Rhodaniennes（S.E.C.A.B.R.）, pp.48−50.

――――――（2003）: « Les thermes de l'oppidum de Gaujac（Gard）», in *Revue archéologique de Narbonnaise*, tome 36, pp.133-176.

Clément, Pierre A.（1993）: *Églises Romanes oubliées du Bas Languedoc*, Montpellier, Les Presses du Languedoc.

Corvisier, Christian（2000）« Saint-Laurent-des-Arbres : Église fortifiée, château et tours », in *Congrès Archéologique de France（1999, Gard）*, Société Française d'Archéologie, pp.311-337.

Duclaux, Lise（1999）: « Saint-Victor-la-Coste », in La Sauvegarde de l'Art Français, Cahier 12, Paris, Picard Éditeur.

Durand, Albert（1892）: *Études historiques sur St-Laurent-des-Arbres en Languedoc*,（Extrait des *Mémoires de l'Académie de Vaucluse*, 2ème trimestre 1892, Avignon）, réédition par « Les amis du Livre », Saint-Laurent-des-Arbres, 1979.

――――――（1899）: « La tour de Ribas et les monuments historiques de Saint-

Laurent-des-Arbres（Gard）», in *Congrès archéologique de France（1897, Nîmes）*, Société Française d'Archéologie, pp.257-266.

Goiffon, Etienne（1881）: *Dictionnaire topographique, statistique et historique du diocèse de Nîmes*, Nîmes, Libraire Grimaud, réimprimé par British Library, 2012.

Goury, Dominic（1997）: « L'oppidum du Camp de César à Laudun : 1er acquisitions de la recherche 1990-1994 », in *Revue archéologique de Narbonnaise*, tome 30, pp.125–172.

――――――（2004）: « Laudun–Le camp de César », in *ADLFI. Archéologie de la France*. pp.1-11.（https://journals.openedition.org/adlfi/12045　2021.6.1 アクセス）

Guillemain, Bernard（1966）: *La cour pontificale d'Avignon 1309-1376 : Étude d'une société*, Paris, Éditions E. de Boccard.

Labande, Léon-Honoré（1902）: *Études d'histoire et d'archéologie romane. Provence et Bas-Languedoc, I. Églises et chapelles de la région de Bagnols-sur-Cèze nord-est du diocèse d'Uzès*, dessins par M. Léon Alègre, Paris, Picard et fils.

Lassalle, Victor（1970）: *L'influence antique dans l'art roman provençal*, Paris, Éditions E. de Boccard.

――――――（2003）: « Les symboles des évangélistes de la coupole à l'église romane de Saint-Laurent-des-Arbres（Gard）: de la copie à la création », in *Archéologie du Midi médiéval*, tome 21, pp.225-231.

Masanelli, J.-C.（1985）: « Saint-Saturnin à Gaujac », in *Rhodanie*, no.16, Bagnols-sur-Cèze, Société d'Étude des Civilisations Antiques Bas-Rhodaniennes（S.E.C.A.B.R.）, pp.28-30.

Missonnier, Céline（1999）: « L'église Sant-Vincent sur l'oppidum de Gaujac », in *Rhodanie*, no. 72, Bagnols-sur-Cèze, Société d'Étude des Civilisations Antiques Bas-Rhodaniennes（S.E.C.A.B.R.）, pp.32–47.

Narasawa, Yumi（2015）: *Les autels chrétiens du Sud de la Gaule（Ve-XIIe siècles）*, Turnhout, Brepols, 2015.

Nougaret, Jean et Saint-Jean, Robert（1975）: *Languedoc roman*, Saint-Léger-Vauban, Zodiaque.

Pécout, Philippe（2006）: *Les églises fortifiées du Midi de la France*, Saint-Cyr-sur-Loire, Éditions Alan Sutton.

Pelaquier, Elie（1984）: « Le Castellas de Siant-Victor », in *Rhodanie*, no. 11, Bagnols-sur-Cèze, Société d'Étude des Civilisations Antiques Bas-Rhodaniennes（S.E.C.A.B.R.）, pp.3–16.

Pérouse de Montclos, Jean-Marie, dir.（1996）: *Languedoc-Roussillon, Le guide du patrimoine*, Paris, Hachette.

Poisson, Olivier（2006）: « Saint-Paul-les-Fonts », in *Cahier de la Sauvegarde de l'Art Français*, no,19, Dijon, Éditions Faton, pp.127-129.

Provost, Michel, et al.（1999）：*Carte Archéologique de la Gaul, 30, tome 3, Le Gard*, Académie des Inscriptions et Belles-Lettres.

Robin, Françoise（1999）：*Midi Gothique de Béziers à Avignon*, Paris, Picard.

Rouquette, Jean-Maurice（1980）：*Provence romane tome 1, La Provence Rhodanienne*, Zodiaque, La Pierre-qui-Vire.

Vallery-Radot, Jean（1963）：« Saint-Laurent-des-Arbres », in *Congrès archéologique de France（1963, Avignon et Comtat-Venaissin）*, Société Française d'Archéologie, pp.244-256.

Vidal, Laurent et Ardagna, Yann（2010）：« Laudun-L'Ardoise（Gars）. Chapelle Saint-Jean de Todon alias Saint-Jean de Rouzigue », in *Archéologie médiévale*, no.40, Paris, CNRS Éditions, pp.263–264.

Vidal, Laurent et Petitot, Hervé（2012）：« Saint-Victor-la-Coste, Mayran », in *Bilan scientifique régional Languedoc–Roussillon*, p.108.

Werth, François（2013）：*Le patrimoine caché et méconnu en Languedoc-Roussillon*, Aix-en-Provence, Ouest-France.

Web-site

AdlFI（https://journals.openedition.org/adlfi/）2021.6.1 アクセス

Base Mérimée（http://www.culture.gouv.fr/culture/inventai/patrimoine/）2021.6.1 アクセス

Nemausensis.com（http://www.nemausensis.com/）2021.6.1 アクセス